

研究報告書第72号

F0801

学校への適応感を高める指導の研究

2003・3

山形県教育センター

は し が き

学級をはじめとした様々な集団での生活や活動を通して、生徒と教師そして生徒相互の信頼や友情をはぐくみ、生徒一人一人が自己の個性を発揮し伸ばしていくことが、学校に求められています。そのために、日常の教育活動の中で様々な取り組みがなされていますが、特に工夫が求められるのは、学習や課外活動など学校生活が始まる入学時や新学期であると考えられます。これから続いて行く学校生活に積極的に取り組む意欲が持てるように、この時期にいかに生徒の適応感を高め、どのように指導や援助をしていくかが大きな課題であるからです。

そこで、本研究では中学校1年生に焦点を当て、学校生活への適応の実態と学校における指導・援助の在り方を把握し、「適応感低下の予防」と「適応感を高める指導や援助（全体指導と個別指導）」についての方策や工夫を示すことをねらいにして調査・研究を進めてまいりました。実態調査にもとづいて作成した「中学校生活アンケート」は、個々の生徒の適応状況や学級の様子を把握するために役立つものと思います。また、聞き取り調査で得られた多くの事例をモデル化し、「適応指導のアイディア」としてまとめ、本調査研究の成果が実際の指導場面で役立つように編集しました。本研究集録が学校現場で活用され、実践の一助になりますことを願っております。

最後になりますが、実態調査や聞き取り調査にご協力下さいました各学校の教職員の皆様と児童・生徒諸君に対し、この場を借りて御礼申し上げます。

平成15年3月

山形県教育センター
所長 鈴木 強 太

も く じ

は し が き	1
---------------	---

1 研究の概要

(1) 研究のねらい	4
(2) 研究の進め方	5
(3) 研究の特徴	5

2 研究の経過

(1) アンケート調査	6
(2) チェックシート「中学校生活アンケート」の作成	16
(3) 聞き取り調査	18
(4) 具体的な適応指導アイデアの作成	20

3 研究の内容

(1) チェックシート「中学校生活アンケート」の使い方	21
(2) 適応指導のアイデアの使い方	27
(3) 適応指導のアイデア集	

ア 新人生を迎えるにあたって

① 入学前の面接相談	29
② 中学校一日体験入学	30
*エピソード①	
③ 上級生が行う中学校紹介	31
*エピソード②	

イ 4月の初発指導を工夫して

④ 入学式の演出	32
⑤ 対面式と部活動紹介	33
⑥ 校内オリエンテーリング	34
⑦ 目標づくりは慌てずに、振り返りの場も	35

ウ 行事をとらえて

⑧ 兄弟学級の活用	36
⑨ 宿泊学習で学級組織づくり	37
⑩ 応援クラスマッチ	38

エ 必要に応じて、継続的に

【A 学校生活を楽しく過ごすために】

⑪ 一人一人が活躍する場面の設定	39
*エピソード③	
⑫ 生徒主体の学年朝会	40

【B 生徒と先生の関わりを良くするために】

⑬ 日課にそった指導体制づくり	41
⑭ 教師と生徒のバリアフリー	42
⑮ 生徒を語る学年部会	43
⑯ 私的な会話を多く	44

*エピソード④

【C よく分かり取り組めるために】

⑰ 一日でわかる1年間の学習	45
⑱ 家庭学習ノートの活用	46
*エピソード⑤	
⑲ テストに向けてのチェックカード	47
⑳ 生徒へのステップアップメッセージ	48

*エピソード⑥

【D 友だちと仲良くするために】

㉑ 構成的グループエンカウンター	49
㉒ Q-Uで学級診断	50

【E 充実した部活動にするために】

㉓ 部活動を決定するまで	51
㉔ 任意加入の部活動	52

*エピソード⑦

【F よい雰囲気づくりのために】

㉕ 校内の雰囲気づくり	53
㉖ こだわりの教室環境整備	54
㉗ 班替えでの留意点	55
㉘ 生徒に投影する教師の人間関係	56
㉙ すこやかネットワーク	57

*エピソード⑧

【G つまずきを乗り越える力を育てるために】

㉚ 相談はいつでもどこでも誰とでも	58
㉛ 定期教育相談	59
㉜ 心の整理箱	60
㉝ 自分のよさを知る	61
㉞ 生活アンケートの活用と生徒理解職員会議	62
㉟ 個別の教育相談的かわり	63

4 まとめと課題

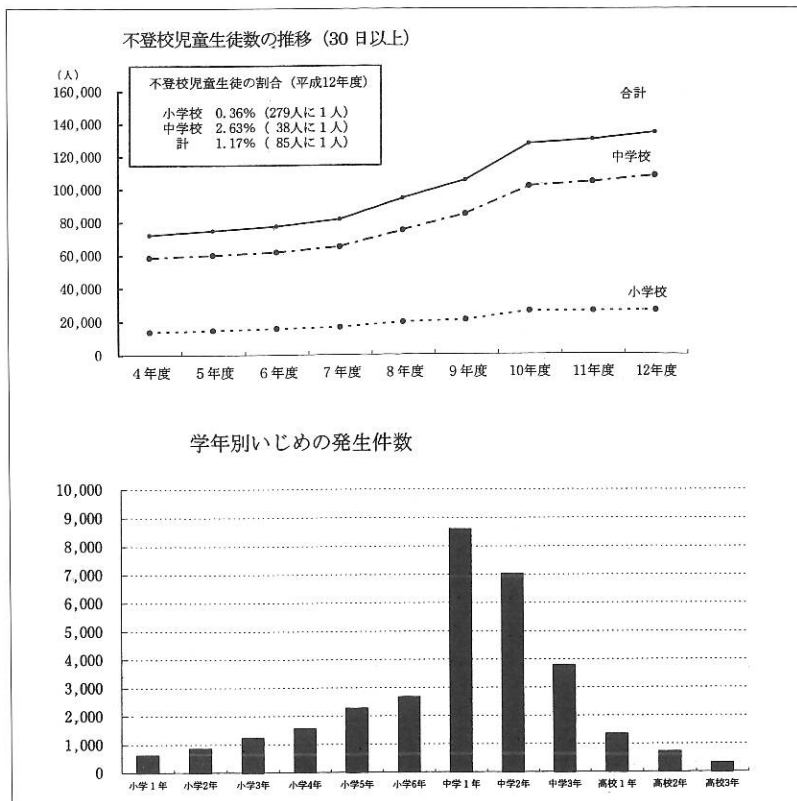
1 研究の概要

(1) 研究のねらい

不登校の児童・生徒が全国で13万人を超え、中学校においては各学級に一つは空いたままの席があるという状況が続いており、その数は小学校の約3倍に急増する。また、いじめ発生件数も、中学校1年生でピークを迎える。

山形県教育センター教育相談部においても、中学校1年生の来所相談の約9割は不登校と集団不適應についての相談であり、「学級や学校生活になじめない」、「友人関係を上手く結べない」、「教室に入れない」という適應に関する悩みを訴えている。

そこで、本研究では中学校1年生に焦点を当て、中学校生活への適應の実態を把握し、生徒の適應感を高めるためにはどのように指導すればよいかを調査研究する。そして、各中学校で実施されている方法を集約して、現場で役立つ具体的な適應指導マニュアルとして提言しようとするものである。



平成14年度「生徒指導上の諸問題の現状と文部科学省の施策について」より

(2) 研究の進め方

本研究は、調査の分析から仮説を立ててそれを証明するという研究スタイルではなく「ナレッジマネジメント」の考えに立って進めてきた開発的研究である。

ナレッジマネジメントとは、個人の持つナレッジ（知識）を、組織として共有・活用することにより、商品やサービスなどの付加価値を向上させる企業経営上の手法である。ナレッジには、語りにくい知識である「暗黙知」と、明示された知識である「形式知」がある。成功や失敗の体験によって蓄積された暗黙知を、文章や図表などで他人に伝達できる形式知にすることによって、次の行動へと活用できる生きた知恵にしようとする考え方である。

本研究は、そのナレッジマネジメントの考え方に基づいて、各中学校で行われている具体的な適應指導方法と、その成功のコツや押さえないツボなどの暗黙知を集約し、他の学校でもやれるように「アイデア集」として表出し形式知とするように進めてきた。

3年間の研究経過は、およそ次のようである。

1年次（平成12年度）

- ・研究の概要協議

2年次（平成13年度）

- ・研究のまとめ方協議
- ・アンケート調査の集計・分析
- ・適應チェックリストの作成

3年次（平成14年度）

- ・理論研究（参考文献）
- ・適應指導マニュアルのトピック案作成
- ・聞き取り調査の実施
- ・マニュアル検討
- ・まとめ（原稿執筆）

(3) 研究の特徴

本調査研究には次の特徴がある。

- ・ナレッジマネジメントの考えに立つ開発的研究である。
- ・指導対象学年を中学校1年生に限定し、指導の時期は1学期が中心である。
- ・研究成果を「中学校生活アンケート」と「適應指導アイデア集」にまとめた。

各中学校で、P24に綴じ込んだ「中学校生活アンケート」を使って個人や学級の適應の状況をチェックし、「適應指導アイデア集」を参考に必要の指導・支援を行っていただきたい。

さらには、本研究を教育現場の実践に役立てていただくことで、新たな知恵を蓄積してより質の高い適應指導が行われていくことを願っている。

2 研究の経過

(1) アンケート調査

ア 調査の目的

本研究を進めるにあたり、次の3点をねらいとしてアンケートによる実態調査を行った。

- ① 県内公立小学校6年生の中学校生活への期待と不安の実態を明らかにする。
- ② 県内公立中学校1年生の学校生活への適応の実態を明らかにし、学校生活への適応に関する問題点と指導の方向性を探る。
- ③ 教員が中学校1年生の適応の実態をどのようにとらえているかを把握し、明らかにする。

本アンケートは、適応感に関係すると思われる学校生活の各場面や諸事項について、生徒と教員の適応感に関する見方、捉え方をうきほりにしながら各項目間の関係を検討し、生徒の学校生活に対する適応感を高めるための糸口や改善点を探し出すことを目的に実施した。そのため、中学校にお願いしたアンケートは、生徒用と教員用アンケートの質問項目をほぼ同じとした。

イ 調査方法

県内の公立小学校から学校規模、所在地を考慮して学校を抽出し、その学校の児童(6年生)を対象にして実施した。県内の公立中学校についても同様の方法で抽出し、その学校の生徒(1年生)と教員を対象にして実施した。

調査にあたっては、山形県教育センターで作成した無記名の調査票(アンケート用紙)を対象校に配布し、記入に要する時間の目安を10～15分程度とし、生徒の様子を見て調整をお願いした。小学6年生については、「小学校を卒業し中学校に入学するにあたっての、児童の今の気持ちを正直に回答させる」こと、中学1年生については、「1年間の中学生生活を終えるにあたっての、生徒の今の気持ちを正直に回答させる」ことをお願いした。教員についても同様の調査票を配布し、抽出された中学校の校長、教頭、教諭(講師、助教諭を含む)、養護教諭のすべての教員を対象とし、「生徒への実施結果とは関係なく、先生方が思われたとおりに回答する」ことをお願いした。

記入した調査票は各学校ごとに一括返送してもらい、山形県教育センターで統計的に処理をした。また、集計にあたっては、調査の目的を逸脱しないように十分に配慮した。得られたデータはすべて一括して扱い、御協力いただいた学校や個人に迷惑をかけることのないように、慎重に作業を進めた。

ウ 調査対象者・対象校の抽出

以下の方針を基本にし、調査対象者(児童・生徒)数を決定した。

- ① データ分析の信頼性の基準が統計学上5.7%であることを考慮し、対象者数は平成12年度学校基本調査に基づく児童・生徒数の5.7%を目安とする。
- ② 地区の偏りによるデータの偏りを防ぐため、地区(村山、最上、置賜、庄内)による偏りがないようにする。

- ③ 学校規模の偏りによるデータの偏りを防ぐため、学校規模(小規模;1～11学級、中規模;12～18学級、19～27学級)ごとに均等になるようにする。

次に、決定対象者数に近い人数になるように、無作為に対象校を抽出した。ただし、対象校に、過去1年間の県教育センターの他調査研究対象校が含まれないように配慮した。

調査対象校数と対象者数、及びその内訳は表1～3のとおりである。

表1 調査対象校数と対象者数

	児童・生徒数	対象校数	5.70%	調査対象者数	回答者数
小学6年生	13924	13	794	813	799
中学1年生	13764	8	785	820	777
	—	対象校数	調査対象校の教員数		回答者数
教員	—	8	190		175

表2 小学校の内訳

	小規模校			中規模校			大規模校		
	生徒数	5.70%	対象校数	生徒数	5.70%	対象校数	生徒数	5.70%	対象校数
村山	2082	119	3	2272	130	1	1934	110	1
最上	671	38	1	280	16	1	245	14	—
置賜	942	54	1	1014	58	1	899	51	1
庄内	1499	85	2	1319	75	1	767	44	—
小計	5194	296	7	4885	315	4	3845	219	2

表3 中学校の内訳

	小規模校			中規模校			大規模校		
	生徒数	5.70%	対象校数	生徒数	5.70%	対象校数	生徒数	5.70%	対象校数
村山	1245	71	1	2811	160	1	2306	131	1
最上	736	42	1	406	23	—	0	0	—
置賜	1277	73	1	1233	70	1	195	11	—
庄内	1080	62	1	1079	62	—	1396	80	1
小計	4338	247	4	5529	315	2	3897	222	2

エ 調査用紙

- ① 調査対象ごとに、次のような基本方針を立てて調査用紙を作成した。

〈小学6年生〉

- ・ 適応場面を考慮しながら、中学校生活について児童が持っている期待や不安など、率直な思いを引き出す。

〈中学1年生〉

- ・ 1年間の中学校生活を振り返る形で記入してもらう。

- ・小学校時代に思い描いていたこととの違いを確認する。
- ・生徒が中学校生活を受け入れるとき、どの適応場面にどの程度のハードルが存在するかを明らかにする。
- ・適応場面を考慮しながら、中学校生活について生徒が持った率直な思いを引き出す。

〈教員〉

- ・中学1年生用のものと同じ質問項目を設け、生徒の思いと教職員の感じ方の違いがどのような場面で顕著であるかを明らかにする。

② 調査対象ごとに次のような領域にわたり、質問項目を設けることとした。

〈小学6年生〉

- ・意識・感情面（中学校生活への期待と不安など）

以上1つの領域について、選択式で10項目を設け、各項目とも選択肢を4つとした。また、各項目について、そのように考えた理由を自由記述してもらうようにした。

〈中学1年生・教員〉

- ・意識・感情面（学校や学級の雰囲気、小学校時代の思いとの相違）
- ・対人関係面（友だち、担任、部活動顧問）
- ・集団活動面（特別活動、部活動）
- ・その他（登下校、休み時間、学校のきまり、進路意識、学校や学級の中での自分の役割）

以上4つの領域にわたって、選択式26項目と自由記述式2項目を設け、選択式の項目の選択肢は4つとした。

オ 調査の結果

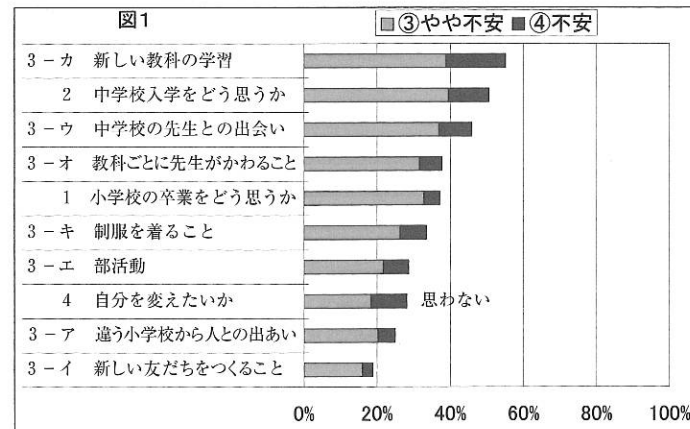
単純集計結果は別表1～3（P13～15）のとおりである。小学校6年生のアンケートにおいて自由記述してもらった「そのように感じる理由」については、調査項目ごとに類型化して集計し、単純集計結果（別表1）に添えた。なお、別表1の質問項目3-アで、回答者の合計人数が725と他に比べて少ないのは、中学校入学の際に調査対象校以外の小学校からの入学者がいないため、回答することができなかった学校があったからである。

次に、調査対象ごとに集計結果を整理し、特徴的な事柄について考察も含めて述べることにする。

〈小学6年生〉

質問項目1～3について、選択肢の③か④のいずれかを選んだ（不安を感じる）人数の割合が多い順に並べ、グラフ化した（図1）。

一般的な質問事項である「2 中学校入学をどう思うか」と「1 小学校卒業をどう思うか」を除いた具体的な質問項目に着目すると、「3-カ 新しい教科の学習」、「3-ウ 中学校の先生との出会い」、「3-オ 教科ごとに先生がかわること」が上位に、「3-イ 新しい友だちをつくること」と「3-ア 違う小学校からきた人との出会い」が下位に位置している。



「新しい教科の学習」について不安な児童は「学習内容の理解」をその理由に挙げ、楽しみな児童は「学習内容に対する興味」をその理由に挙げている。「中学校の先生との出会い」については、楽しみ・不安のいずれの回答でも、「教科ごとに先生がかわること」により「先生に対するイメージ」を理由に挙げている児童が圧倒的に多い。「教科ごとに先生がかわること」については、不安な理由として「教師との出会い」を挙げている児童が過半数を占めているが、強い不安を抱えている児童については、「授業内容」がその理由の多くを占めている。

「新しい友だちをつくること」や「違う小学校からきた人との出会い」を楽しみにしている児童は8割程度と多いものの、見方を変えれば約5人に1人は不安を感じていると言える。楽しみな児童は「交友関係の幅の広がり」を主な理由としてあげている反面、不安な児童では「交友関係の作り方」がその理由の多くを占めている。

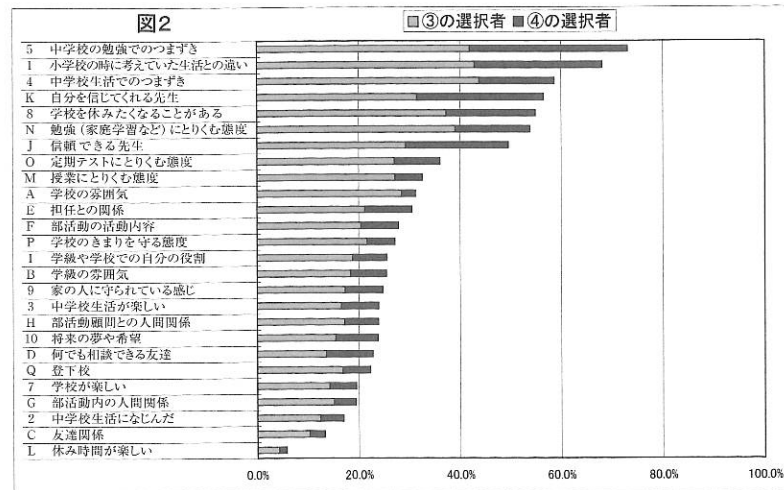
各質問項目とも、不安の理由については、中学校についての知識のなさから、イメージが先行して生まれていると思われるものが多かった。正しい情報と実際の先輩の声や映像などを提供することによって、そうした不安を薄れさせることができるものと考えられる。

〈中学1年生〉

各項目への回答が「あまりよくない」「とてもよくない」など、現状に対して否定的であったり不安を感じるなど、中学校生活への適応という面でマイナス評価と考えられる選択肢（各調査項目の選択肢の③か④のいずれか）を選んだ人数の割合が多い順に並べ、グラフ化した（図2）。

図2で③と④の選択者の合計が過半数を超えた質問項目に着目すると、「5 勉強でのつまずきを感じたこと」を筆頭に、「4 中学校生活で（何らかの）つまずきがあったこと」、「K 自分を信じてくれる先生がいないこと」、「8 学校を休みたくなることがあること」、「5 勉強（家庭学習など）に取り組む態度がよくないこと」、「J 信頼できる先生がいないこと」が続いている。実際には、上位第2

位に「1 小学校生活と中学校生活の違いがあること」があがっているが、この質問項目で「違いがある」という選択肢を選んだことが必ずしも現状に対する否定的意見とは言えないので、ここでは、残る上位6項目に着目したい。



まず、図2で最上位にある「5 中学校の勉強でつまずきを感じたことがあるか」と他の質問項目をクロスさせたところ、「中学校生活でつまずき」と「学習面での態度」との間に特に高い相関がみられた(表4)。この結果については、調査の実施時期が年度末であったため、それまでの間に人間関係や学習以外の生活面におけるつまずきの要因が解消されたか、あるいは、成績に直面する時期であったことが「学習」への不安を増幅させたのかも知れない。いずれにしろ、「学習のつまずき」と「中学校生活でつまずき」が大きな関わりを持つこと、そして、「勉強(家庭学習など)に取り組む態度が良くない」と回答している生徒が2人に1人いることや「授業・定期テストへの取り組みの悪さの」自覚があることを念頭に、「学習のつまずき」に対処すべきであろう。具体的には、小学校の学習内容や方法、家庭学習(宿題)の実態をとらえ、宿題の出し方や点検の仕方、予習・復習など家庭学習の仕方、ノートの作り方等、適切な学習指導や学習習慣の定着に努める必要があらう。

表4 「中学校の勉強でつまずきを感じたことがあるか」との相関

質問項目	相関係数
4 中学校の生活でつまずきを感じたことがあるか	0.361
M 授業に取り組む態度(が、よいかよくないか)	0.320
O 定期テストに取り組む態度(が、よいかよくないか)	0.271

(値が0.27以上を示したものを示す)

「K 自分を信じてくれる(守ってくれる)先生がいるかどうか」については、

いないと回答した生徒が56.6%であり、ほとんどいないと感じている生徒は4人に1人であった。学校教育に携わる者にとっては極めて厳しい数字である。数字だけを見れば、「教師に対する生徒の不信感が渦を巻いているのではないか」という危惧が生じる。しかし、調査対象校を含め県全体を見ても、現実にはそのような状況にあるわけではない。不信感と言うよりは、むしろ、もっと自分に目を向けて個としての存在を認めてほしいという、教師に対する期待感の表れと解釈することができる。

「2 中学校生活になじめたか」と「3 中学校生活が楽しいか」の2つの質問項目に対しては、否定的な回答を寄せている生徒の割合は20%程度であり、比較的低い数字になっている。しかしながら、この質問は「学校生活への適応の度合い」を知る重要な尺度であり、他の質問項目との相対的な位置関係で考察すべきではない。「なじんでない、楽しくない」と感じている生徒が5人に1人もいる、と解釈すべきであろう。そこで、この2つの質問項目のそれぞれと他の質問項目とクロスさせ、その相関関係を調べた。弱いながらも比較的高い相関が見られるとされる0.25以上の相関係数を示した質問項目を表5に示す。類似の質問項目以外では、友達や部活動内の人間関係、学校を休みたくなる、学校や学級の雰囲気、中学校生活でつまずき、などが挙がっている。一方、学習や教師との人間関係に関する質問項目との相関はほとんど見られない。

表5 中学校生活・クロス集計結果の相関

		各質問項目	相関係数
2	中学校の生活になじめたか	7 学校が楽しいか	0.469
		3 中学校の生活が楽しいか	0.464
		C 友達関係はどうか	0.362
		A 学校の雰囲気はどうか	0.348
		B 学級の雰囲気はどうか	0.326
		8 学校を休みたくなることがあるか	0.324
		4 中学校生活でつまずきを感じたか	0.304
		D 何でも相談できる友達	0.274
		L 休み時間は楽しいか	0.264
		G 部活動内の人間関係はどうか	0.253
3	中学校の生活が楽しいか	7 学校が楽しいか	0.691
		2 中学校の生活になじめたか	0.464
		C 友達関係はどうか	0.442
		8 学校を休みたくなることがあるか	0.433
		A 学校の雰囲気はどうか	0.386
		L 休み時間は楽しいか	0.357
		B 学級の雰囲気はどうか	0.343
		Q 登下校はどうか	0.293
		G 部活動内の人間関係はどうか	0.292
		4 中学校生活でつまずきを感じたか	0.288
		F 部活動の活動内容はどうか	0.283

〈中学校教員〉

各質問項目について、「中学校生活への適応という面でマイナス評価をしている生徒がいる」と回答した(各調査項目の選択肢の③か④のいずれかを選んだ)人数の割合が多い順に並べてみた。

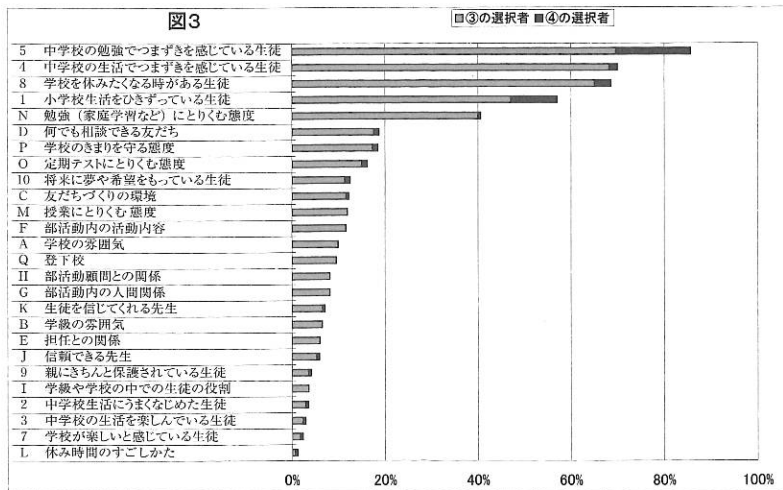


図3によると、他の項目と比べて突出しているのが、「5 中学校の勉強でつまずきを感じている生徒がいるか」「4 中学校の生活でつまずきを感じている生徒がいるか」「8 学校を休みたくなる生徒がいるか」「I 小学校生活をひきずっている生徒がいるか」「N 勉強（家庭学習など）にとりくむ態度がよいのか」の5項目となっている。下位に属する項目と対照して検討してみると、「学習や生活でつまずきを感じたり休みたくなったりする生徒がいるものの、多くの生徒が学校生活になじんで楽しく過ごしている」と感じている教員が極めて多いことがうかがえる。また、約9割以上の教員が、「生徒は、学校や学級の雰囲気・担任との関係・部活動内の人間関係を良いと感じている」「生徒は、信頼できる先生や自分を信じてくれる先生がいると考えている」と回答しており、生徒との意識のずれが見られる。学習面については、「授業に取り組む態度は比較的よいものの、家庭学習などはまだ足りない」と感じている教師が多いようである。

別表1 中学校生活について思うこと 小学校

1 あなたは、小学校を卒業することについて、どのように思いますか。

	人間関係	部活動	学習	その他	合計
①とても楽しみ	31	8	9	143	191
②少し楽しみ	51	17	10	175	253
③少し不安	11	2	5	99	117
④とても不安	2	1	3	13	28
合計	178	28	6	430	642

2 あなたは中学校に入学することについて、どのように思いますか。

	人間関係	部活動	学習（勉強・授業）	その他	合計
①とても楽しみ	74	61	16	57	208
②少し楽しみ	49	41	18	50	158
③少し不安	134	13	101	54	302
④とても不安	41	4	24	13	82
合計	298	119	159	174	750

3 あなたは、中学校生活における次のア〜キについて、どのように思いますか。

ア ちがう学校からきた人たちと出会うこと	交友関係の広がり	交友関係の作り方	いじめに関係すること	その他	合計
①とても楽しみ	280	11	0	5	296
②少し楽しみ	169	37	1	9	216
③少し不安	18	101	13	7	139
④とても不安	4	20	4	3	31
合計	471	169	18	24	682

イ 新しい友だちをつくること

	交友関係の広がり	交友関係の作り方	いじめに関係すること	その他	合計
①とても楽しみ	380	10	0	29	419
②少し楽しみ	134	20	2	18	174
③少し不安	11	98	6	8	123
④とても不安	1	14	0	5	20
合計	526	142	8	60	736

ウ 中学校の新しい先生方と出会うこと

	先生に対するイメージや関心	教科ごとに先生が変わること	その他	合計
①とても楽しみ	128	16	19	163
②少し楽しみ	197	28	14	239
③少し不安	246	17	12	275
④とても不安	61	2	4	67
合計	632	63	48	743

エ 部活動に入り活動すること

	活動内容に対するイメージ、関心や意欲	部内の人間関係	その他	合計
①とても楽しみ	317	66	9	392
②少し楽しみ	124	27	7	158
③少し不安	106	51	11	168
④とても不安	33	15	5	53
合計	580	159	32	771

オ 教科ごとに授業の先生がかわること

	授業や学習について先生との出会い、人間関係	その他	合計
①とても楽しみ	35	128	163
②少し楽しみ	54	205	259
③少し不安	51	146	197
④とても不安	16	15	31
合計	156	494	650

カ 小学校では習わなかった新しい教科を勉強すること

	学習内容への興味・関心	学習内容の理解	その他	合計
①とても楽しみ	172	8	3	183
②少し楽しみ	129	23	4	156
③少し不安	20	266	10	296
④とても不安	10	106	3	119
合計	331	403	20	754

キ 制服を着ること

	好み	個性	機能性	中学生としての自覚	その他	合計
①とても楽しみ	117	18	3	65	32	235
②少し楽しみ	106	18	12	39	46	221
③少し不安	101	13	50	0	33	197
④とても不安	29	5	12	1	6	53
合計	353	54	77	105	117	706

4 中学生になったら、あなたは自分をかえたいと思いますか。

	これからの自分のあり方	現在の自分のあり方	その他	合計
①強く思う	149	63	13	225
②少し思う	189	88	20	297
③あまり思わない	7	97	25	129
④ぜんぜん思わない	1	61	11	73
合計	346	309	69	724

別表2 中学校生活について思うこと 中学校

1 小学校の時に考えていたものと、実際の中学校生活はどうでしたか	
人数	①ほとんど同じ ②だいたい同じ ③少し違う ④かなり違う 合計
割合	3.9% 28.1% 42.9% 25.2% 777
2 あなたは、中学校の生活にうまくなじめたと思いますか	
人数	①とても思う ②少し思う ③あまり思わない ④ほとんど思わない 合計
割合	29.2% 63.8% 12.4% 4.6% 777
3 あなたは、中学校の生活が楽しいと思いますか	
人数	①とても思う ②少し思う ③あまり思わない ④ほとんど思わない 合計
割合	31.3% 44.8% 16.5% 7.5% 777
4 あなたは、中学校生活でつまずきを感じることがありますか	
人数	①ほとんどない ②あまりない ③少しある ④たくさんある 合計
割合	11.6% 29.7% 43.8% 14.9% 777
5 あなたは、中学校の勉強でつまずきを感じることがありますか	
人数	①ほとんどない ②あまりない ③少しある ④たくさんある 合計
割合	6.8% 20.1% 42.0% 31.1% 777
6 あなたにとって、中学校の生活における次のA～Qはどうでしたか	
A 学校の雰囲気	
人数	①とてもよい ②少しよい ③あまりよくない ④とてもよくない 合計
割合	19.9% 48.8% 28.4% 2.8% 777
B 学級の雰囲気	
人数	①とてもよい ②少しよい ③あまりよくない ④とてもよくない 合計
割合	33.2% 41.3% 18.4% 7.1% 777
C 友だち関係	
人数	①とてもよい ②少しよい ③あまりよくない ④とてもよくない 合計
割合	49.0% 37.7% 10.3% 3.0% 777
D 何でも相談できる友だち	
人数	①たくさんいる ②少しいる ③あまりいない ④ほとんどいない 合計
割合	24.3% 52.9% 13.5% 9.3% 777
E 担任との関係	
人数	①とてもよい ②少しよい ③あまりよくない ④とてもよくない 合計
割合	24.5% 45.0% 21.2% 9.3% 777
F 部活動の活動内容	
人数	①とてもよい ②少しよい ③あまりよくない ④とてもよくない 合計
割合	33.5% 38.6% 20.4% 7.5% 778
G 部活動内の人間関係	
人数	①とてもよい ②少しよい ③あまりよくない ④とてもよくない 合計
割合	43.0% 37.0% 15.1% 4.4% 777
H 部活動間との関係	
人数	①とてもよい ②少しよい ③あまりよくない ④とてもよくない 合計
割合	26.1% 50.1% 17.2% 6.7% 775
I 学級や学校の中での自分の役割	
人数	①たくさんある ②少しある ③あまりない ④ほとんどない 合計
割合	12.3% 52.1% 18.6% 6.8% 778
7 あなたは、学校が楽しいですか	
人数	①とても楽しい ②少し楽しい ③少しつらい ④とてもつらい 合計
割合	31.7% 48.8% 14.2% 5.3% 774
8 あなたは、学校をやめたくなることがありますか	
人数	①ほとんどない ②あまりない ③少しある ④たくさんある 合計
割合	28.5% 21.5% 28.9% 17.7% 775
9 あなたは、家の人に知られていると思いますか	
人数	①とても思う ②少し思う ③あまり思わない ④ほとんど思わない 合計
割合	27.6% 39.7% 17.3% 7.5% 776
10 あなたは、将来に夢や希望をもっていますか	
人数	①たくさんある ②少しある ③あまりない ④ほとんどない 合計
割合	35.2% 41.0% 15.4% 8.4% 778

別表3 生徒の学校生活について思うこと 教員

1 小学校生活をひきずっている生徒	
人数	①ほとんどない ②あまりない ③少しいる ④多くいる 合計
割合	12% 24% 47% 10% 370
2 中学校生活にうまくなじめた生徒	
人数	①多い ②少しいる ③あまりいない ④ほとんどいない 合計
割合	77% 20% 3% 1% 171
3 中学校の生活を楽しんでしている生徒	
人数	①多い ②少しいる ③あまりいない ④ほとんどいない 合計
割合	85% 12% 2% 1% 170
4 中学校の生活でつまずきを感じている生徒	
人数	①まったくない ②あまりない ③少しいる ④多くいる 合計
割合	10% 20% 68% 2% 170
5 中学校の勉強でつまずきを感じている生徒	
人数	①ほとんどない ②あまりない ③少しいる ④多くいる 合計
割合	3% 11% 76% 10% 168
6 先生方からみて、生徒は次のA～Qどのように感じていると思いますか	
A 学校の雰囲気	
人数	①とてもよい ②少しよい ③あまりよくない ④とてもよくない 合計
割合	37% 63% 10% 0% 172
B 学級の雰囲気	
人数	①とてもよい ②少しよい ③あまりよくない ④とてもよくない 合計
割合	34% 59% 11% 0% 170
C 友だちづくりの環境	
人数	①とてもよい ②少しよい ③あまりよくない ④とてもよくない 合計
割合	28% 66% 12% 1% 172
D 何でも相談できる友だち	
人数	①たくさんいる ②少しいる ③あまりいない ④ほとんどいない 合計
割合	13% 68% 18% 1% 171
E 担任との関係	
人数	①とてもよい ②少しよい ③あまりよくない ④とてもよくない 合計
割合	36% 58% 10% 0% 168
F 部活動内の活動内容	
人数	①とてもよい ②少しよい ③あまりよくない ④とてもよくない 合計
割合	50% 103% 20% 0% 173
G 部活動内の人間関係	
人数	①とてもよい ②少しよい ③あまりよくない ④とてもよくない 合計
割合	27% 65% 8% 0% 172
H 部活動間との関係	
人数	①とてもよい ②少しよい ③あまりよくない ④とてもよくない 合計
割合	43% 67% 14% 0% 172
I 学級や学校の中での生徒の役割	
人数	①たくさんある ②少しある ③あまりない ④ほとんどない 合計
割合	43% 90% 6% 0% 168
7 学校が楽しいと感じている生徒	
人数	①たくさんいる ②少しいる ③あまりいない ④ほとんどいない 合計
割合	64% 34% 2% 1% 170
8 学校を休みたくなる時がある生徒	
人数	①ほとんどない ②あまりない ③少しいる ④たくさんいる 合計
割合	19% 21% 62% 4% 169
9 親にちゃんと保護されている生徒	
人数	①たくさんいる ②少しいる ③あまりいない ④ほとんどいない 合計
割合	72% 24% 4% 1% 170
10 将来に夢や希望をもっている生徒	
人数	①たくさんいる ②少しいる ③あまりいない ④ほとんどいない 合計
割合	38% 49% 11% 1% 166

(2) チェックシート「中学校生活アンケート」の作成

ア 目的

中学校の一年目の生活にどのような思いをもっているか、アンケートによって調べ、そこでの問題点を明確にして、中学校生活を充実させるための対策を考えることができるチェックシートを開発することが目的である。

イ 方法と結果

前節のアンケートの中の、中学生からの回答について、因子分析を行い、中学校生活の適応に関する構造を明らかにした。その分析結果が表1である。

表1 アンケートの因子分析結果

番号・記号	変数名 ^{※1}	因子1	因子2	因子3	因子4	因子5	因子6	因子7
7	学校楽しい	0.8134	0.1501	0.1112	0.1655	0.1048	0.1214	0.0335
3	楽しい	0.7752	0.1125	0.1092	0.1026	0.1212	0.1579	0.06
8	休みたい	0.496	0.1744	0.0987	0.0619	0.0745	0.0297	0.1739
2	なじめた	0.4616	0.0893	0.1367	0.1784	0.1052	0.2245	0.1869
L	休み時間	0.4032	0.0679	0.0522	0.3839	0.0427	0.0673	0.0611
Q	登下校	0.3402	0.1064	0.1587	0.1933	0.0817	0.0577	-0.0052
J	先生信頼	0.1139	0.8252	0.0861	0.0543	0.077	0.0804	0.0071
K	守る先生	0.1167	0.8126	0.1478	0.0433	0.0557	0.0318	0.0853
E	担任	0.1673	0.4811	0.0706	0.0057	0.0928	0.1034	0.0803
9	守る家人	0.1729	0.2711	0.1738	0.0843	0.1519	0.1005	-0.0099
I	役割	0.2191	0.2642	0.2052	0.1146	-0.0267	0.0871	0.1193
O	テスト態度	0.1437	0.0975	0.7289	0.0639	0.0475	0.0361	0.1035
N	勉強態度	0.1163	0.1352	0.7287	0.0415	0.0063	0.0492	0.0239
M	授業態度	0.0638	0.2477	0.5377	0.0877	0.0756	-0.0126	0.0193
P	きまり	0.1287	0.2334	0.3521	0.0092	0.1043	0.0433	0.0581
C	友人関係	0.4392	0.0386	0.0617	0.6256	0.1462	0.1672	0.0823
D	相談友達	0.2015	0.1437	0.1285	0.5831	0.1038	0.0054	-0.0183
F	部活動	0.2029	0.1296	0.0534	0.083	0.6666	0.0455	0.0435
G	部の友達	0.2661	0.0685	0.0137	0.1894	0.5358	0.1211	0.1159
H	部の顧問	0.0745	0.2664	0.1164	0.088	0.4416	0.072	0.0808
B	学級雰囲気	0.3025	0.1101	0.0646	0.0908	0.053	0.6398	0.0247
A	学校雰囲気	0.3209	0.1453	0.0326	0.0935	0.0935	0.5677	0.0862
5	学習つまずき	0.0791	0.1409	0.2324	-0.0283	0.0529	0.0485	0.6203
4	生活つまずき	0.2501	0.0522	0.0768	0.1997	0.1602	0.0807	0.5094
因子負荷量の2乗和		2.8016	2.1195	1.7647	1.1365	1.1135	0.9308	0.837
因子の寄与率(%)		11.6734	8.8312	7.353	4.7355	4.6395	3.8785	3.4876
累積寄与率(%)		11.6734	20.5046	27.8576	32.5931	37.2326	41.1111	44.5986

その結果、次の7つの因子が認められた。

因 子	変数名(質問項目)の番号・記号
1 学校生活の楽しさ	7 3 8 2 L Q
2 先生への信頼感	J K E 9 I
3 学習態度	O N M P
4 友人関係	C D
5 部活動	F G H
6 学校と学級の雰囲気	B A
7 勉強のつまずき	5 4

これらの因子から、因子負荷量^{※2}の高い2項目ずつを選び、資料1(P24)のチェックシート「中学校生活アンケート」を作成した。

また、各因子を示す2項目の合計点について、平均値と分散を求めた。その結果が表2である。これに基づいて、集計結果を因子ごとに記入して、相互に比較できるように、資料2(P25)の「中学校生活アンケート集計表(個人用)」と資料3(P26)の「中学校生活アンケート集計表(30人学級集団用)」を作成した。

表2 中学校生活アンケートの各因子別基礎統計

	因子1	因子2	因子3	因子4	因子5	因子6	因子7	合計点
平 均	3.93	5.3	4.83	3.75	3.83	4.13	5.6	31.37
分 散	2.46	3.06	2.39	1.96	2.24	2.05	2.13	42.56
標準偏差	1.57	1.75	1.55	1.4	1.5	1.43	1.46	6.53
SD(-2) ^{※3}	7.07	8.8	7.93	6.55	6.83	6.99	8.52	44.43
SD(-1) ^{※4}	5.5	7.05	6.83	5.15	5.33	5.56	7.06	37.90
データ数	774	774	776	776	776	776	776	776

※1 変数名：アンケートの質問項目に対応する。

※2 因子負荷量：その因子が持つ特徴をどの程度表しているかを示す数字。

※3 SD(-2)：平均に標準偏差を2倍したものを加えたもの。集計表(P25、26)の要注意ラインに相当する。

※4 SD(-1)：平均に標準偏差を加えたもの。集計表(P25、26)の注意ラインに相当する。

(3) 聞き取り調査

中学校1年生に対して行われている適応指導について、下記の16校に協力を得て、平成14年5～6月、各学校に出向いて聞き取り調査を行った。聞き取り調査にあたっては、事前に担当者が予想したトピック一覧(資料「中学校への適応感を高める指導」)を送って、それを参考にして各学校で行っている適応指導の具体的な方法を教えていただくようお願いした。訪問の時間は各校約1時間程度で、生徒指導担当者や1学年主任等が応じて下さった。聞き取りの際には、生徒や保護者に配布したプリント類や手持ち指導計画等も、差し支えない範囲で提供していただいた。

村山地区	置賜地区	最上地区	庄内地区
山形市立第二中学校 山形市立第三中学校 山形市立第六中学校 山形市立第十中学校 山形市立金井中学校 山形市立蔵王第一中学校	南陽市立赤湯中学校 南陽市立沖郷中学校 南陽市立中川中学校 南陽市立漆山中学校	新庄市立新庄中学校 新庄市立明倫中学校 新庄市立日新中学校 新庄市立萩野中学校 新庄市立八向中学校	酒田市立第一中学校 酒田市立第四中学校 酒田市立第五中学校 酒田市立島海中学校

資料 「中学校への適応感を高める指導」のトピック一覧

中学校への適応感を高める指導

I 新入生を迎えるにあたって

- ① 教育相談体制を充実させるには
- ② 生徒のつまずきを早期発見するには

II 4月の初発指導を工夫して

- ① 入学前オリエンテーション(生徒向け・保護者向け)
- ② 入学式の演出
- ③ 入学後オリエンテーション
- ④ 生徒会活動と部活動の紹介
- ⑤ 学校を知り職員を知る
- ⑥ 各種委員会や係活動の担当生徒の決め方
- ⑦ 学級目標や学級シンボルのつくり方
- ⑧ 授業を始めるにあたって

III 1学期の行事をとらえて

- ① おらほの学校ならではの行事
- ② 楽しい学年集会(学年行事)
- ③ 1年生も活躍できる生徒会活動
- ④ 興味津々の班作り(席替え)
- ⑤ 意気上がる壮行式(激励会)
- ⑥ 次につながる部活動報告会

IV いつもずっと そして 必要ときに

A 学校生活を楽しく過ごすために

- ① 生徒が活躍する場面(居場所)設定の工夫

B 生徒と先生の関わりを良くするために

- ① 学級活動の内容と進め方
- ② 学年集会(学年行事)の内容と進め方
- ③ 朝の会や終わりの会の内容
- ④ 生徒との面談のとり方・やり方
- ⑤ 個々の生徒とのリレーションづくり
- ⑥ 保護者とのリレーションづくり
- ⑦ 保健室の有効利用

C よく分かり取り組めるために

- ① 発言の取り上げ方や指名の仕方
- ② 座席表の活用
- ③ 宿題の出し方や点検の仕方
- ④ 課題や作品の返し方
- ⑤ テストの受けさせ方
- ⑥ 欠席した生徒への手立て
- ⑦ 学習の遅れがちな生徒(下位者)への手立て
- ⑧ 教科通信・教科日より
- ⑨ 図書館の利用指導

D 友だちと仲良くするために

- ① 生徒の他者理解を深める方法
- ② 生徒の人間関係を知る(情報収集の)方法
- ③ 学級活動の内容
- ④ 生徒会(委員会)活動や学年生徒会活動
- ⑤ 学年集会(学年行事)
- ⑥ 活動
- ⑦ 孤立しがちな生徒を発見するための心がけ(休み時間、放課後、給食)

E 充実した部活動にするために

- ① 部活動体制の工夫
- ② 部活動ノート・部活動通信の工夫
- ③ 適切な部を選んで入部するまでの工夫
- ④ 部をサボらせないための工夫
- ⑤ 同級生や上級生との関係も含め、部活動内の仲間意識を育てる工夫
- ⑥ 保護者会との連携の工夫

F よい雰囲気づくりのために

- ① 掲示物や展示物(校外、校舎敷地内、校地内、教室内)で醸し出す
- ② 学級だよりや学級新聞、授業記録や学級日誌で高める
- ③ クラスでのリーダーを育てる
- ④ 生徒の自主性を伸ばし、認め、評価する
- ⑤ 地域を巻き込んで盛り上げる

G つまずきを乗り越える力を育てるために

- ① 生徒の自尊感情を高めるには
- ② 生徒の自己肯定感を向上させるには

(4) 具体的な適応指導アイデアの作成

各学校から聞き取り調査して教えていただいた適応指導法は、担当者が下記のように1件につき1枚ずつ情報カードに打ち込んだ。情報カードは100枚を越えた。

次に、情報カードをトピック（P18 資料参照）ごとに机上に並べ、全てのカードを読んだ上で、他校の実践の参考になると思うものに各担当者が付箋紙を貼っていった。多くの付箋紙が張られたカードを統合・整理し、40枚程度に集約した。

その後、集約したカードについて、「ねらい」・「実施時期」・「具体的な実施方法、実物資料、意味付けや背景となる理論等」・「役割分担や準備」・「成功のコツ、押さえてほしいツボ」の項目について、聞き取ったことをもとに、アイデア集の原稿に書きまとめた。

それらを集めて、チェックリストの因子に対応するように配慮しながら、掲載順や体裁等について、研究協力者に助言をいただきながら検討を重ねた。

Ⅱ — ⑤	○ 中	担当者名
タイトル	校内オリエンテーリング	
入学式の翌日、班ごとに校内の地図をもってオリエンテーリングを行う。職員室の入り方、保健室のや校内電話の使い方、物を破損したときの始末、図書室の利用など、教務の先生や事務の方、図書館司書、養護教諭との出会いを含んだポイントごとの問題が設定されている。班行動をとることや、授業中の校内を静かに回ることや、当面の学校生活で予想される場面での適切な行動を、体験的に理解することができる。		

3 研究の内容

(1) チェックシート「中学校生活アンケート」(P24)の使い方

ア アンケートの使用目的と生徒への説明の仕方

このアンケートは、中学校生活が始まって1か月以上経過し、学習面でも部活などの生活面でも、あるいは教師や友人との関係においても、ある程度の落ち着きが見られた頃実施することが望ましい。使い方の目的は次の二つが考えられる。

- 1 学級全体の状況を把握するため。
- 2 個別に問題を感じている生徒を把握して、早期に対策を立てるため。

アンケートを学級活動の時間に一齐に実施する際には、生徒に、どちらの目的で実施するかを伝えることが大切である。

① 学級全体の状況を把握する目的で使う場合

学級全体の状況を把握する目的の場合には、氏名や性別欄に記入してもらう必要はない。そのため、生徒がその結果で何が起こるか心配することは少ないと予測できる。しかしながら、「このアンケートの結果が個人の成績や生活指導に関係するものではない」ということを説明することが大切である。

② 個別に問題を感じている生徒を把握する目的で使う場合

個別に問題を感じている生徒を把握して対策を立てる目的の場合には、生徒に対する丁寧な説明が必要である。それは、生徒がアンケートに答える際に、「このアンケートで『不安がある』と答えたらどうなるのか」、「希望もしないのに呼び出されたりしないか」、「何か特別な指導を受けるのではないか」、「家の人に言われるのではないか」、「友達にばれるのではないか」などの心配を持つことがあるからである。もしも、このアンケートで正直に不安を表現しても、生徒自身の希望に反するようなことはしないということをはっきり伝えることが大切である。そのためには、たとえば次のような伝え方が考えられる。

「先生は、みなさんの担任として、一人一人が楽しく充実した中学校生活を送ってほしいと思っています。このアンケートは、そのために、皆さんの中学校生活の様子を教えてもらうものです。『楽しくない』とか『充実していない』など不安があると答えた人には、希望によって、先生と相談する時間を作ったり、みんなが楽しくて充実できるようにするための活動を考えていこうと思います。けれども、不安があっても、当分は一人でやっていけるという人もいます。そういう人には、無理に相談や特別な活動を勧めたりすることはありません。先生が勝手にこの結果をご家庭や友達に伝えることもありません。また、学校の成績に影響することはありません。ですから、もしも、何か希望や相談があれば、ぜひそれを裏に書いて下さい。先生は、みなさんと楽しく充実した中学校生活を計画していくための手がかりがほしいのです。」

その上で、不安に対する相談を求める生徒がいた場合に、個別に対応する準備をしておくことが必要である。対応策を用意しないで、問題だけを調査して指摘するのは、状況を改善するよりもより悪化させる危険をもっているからである。

③ 学級集団に対しても、個別の生徒に対しても実態把握をする場合

学級全体としても、個別の問題にたいしても、両方の状況を同時に把握する目的で実施することもできる。その場合には、個別の目的の場合と同様の説明が必要である。

イ 中学校生活アンケート集計表の使い方

アンケート集計表は、個人用と30人学級集団用の二種類がある。

① 個人用（資料2 P25）

個人用では、集計A～集計Gまでの合計点を右の目盛りにも●印で記入して、線で結ぶと、個人の特徴を表すプロフィールが描ける。その結果、●印が「危険ライン」以上にプロットされたところは、1標準偏差以上の偏り（100人中3人程度にしかみられない偏り）がある得点範囲である。そこには、何らかの問題が存在することが予想され、対策が必要とされる。しかしながら、問題があっても、生徒がそれに耐えて克服する力を持っているために、早急に手助けするというよりも、見守ることが必要な場合もある。問題として対策を立てるか、見守るか、ひとりひとりの状態を把握して、総合的な判断をすることが必要である。

プロフィールの特徴は、もっとも低かった領域と、最も高かった領域をみることが重要である。最も低かった領域が問題として取り上げられやすいが、最も高かった領域はその生徒の長所を示している。問題を欠点として改善するよりも、長所をより伸ばすことで問題が改善される場合も少なくない。

とるべき対策の欄は、このテキストの29ページ以降にある「適応指導のアイデア（こんなときにこうする）」を参考にしていきたい。低かった領域を高めることだけにとられず、総合的な判断を行うことが必要である。その上で、個別に、大切にすべき目標を立てて、「個別の教育相談的なかわり」に十分配慮しながら、具体的な適応指導のアイデアを適用することが重要である。

② 30人学級集団用（資料3 P26）

学級集団として集計する場合には、こちらの集計表を使う。集計A～集計Gのそれぞれの平均値を求めて記入すると、学級の特徴を表すプロフィールが描ける。その結果、●印が「危険ライン」以上に打たれるところは、100学級中で1学級にしか現れない（1%水準有意の偏りがある）得点範囲である。学級の場合には個人と異なり、平均値として学級全体に何らかの問題が存在することが予想され、何らかの対策が必要とされる。この場合には、生徒個人の問題ではない点に注意することが必要である。学級経営方針とその内容を見直すことが必要である。また、各学級の学級経営だけでなく、学年経営に問題がないか、さらには地域社会の中での学校経営上の問題がないかなどを検討することも、関連した大事な視点である。

学級集団においても、プロフィールの特徴を、もっとも低かった領域と、最も高かった領域で見えていくことが重要である。最も低かった領域が問題として取り上げられやすいが、最も高かった領域は、その学級が持っている長所を示している。低かった領域だけにとられず、総合的な判断を行うことが必要である。

とるべき対策の欄は、このテキストの29ページ以降にある「適応指導のアイデア」を参考にしていきたい。その上で、学級集団としても、大切にすべき目標を立てて、具体的な適応指導のアイデアを適用することが重要である。

③ 評価について

計画して実施した対策が、効果があったかどうかを評価することが極めて重要である。苦心して考え、計画し、実行した対策が、残念ながら効果をあらわさないこともある。けれども、こうした評価を行うことを通じて、次の対策の方向性が見えてくるのである。

評価の方法は、中学校生活アンケートを半年後や1年後に再度実施する方法もある。その場合には、半年あるいは1年を通じての総括的な評価を知ることができる。

一方、生徒個人に対しても、学級集団としても、アンケート結果から何らかの教育的目標を立て、対策として指導計画を作成した場合には、必ずしも中学校生活アンケートによらない別の評価が必要となる。取り上げた教育的目標や指導計画に盛り込まれた課題がどの程度達成されているのか、随時、形成的な評価をしながら、対策の修正をすることが大切である。そうした評価を行わなければ、効果的でない対策がそのまま続けられる危険性もでてくる。教員として、熱意と誠意を持って行った活動が報われないのは辛いことだが、全く欠点のない「完全な教員」はいない。自らの不十分な点を振り返り、改善していく勇気こそが、教員としての誠意ではないだろうか。

〈注意〉

左の表は資料1（P24）にA～Gの記号を書き加えたものであり、資料2（P25）と資料3（P26）の集計A～Gに対応している。

1 あなたは、中学校の生活が楽しいと思いますか。 ①とても思う ②少し思う ③あまり思わない ④ほとんど思わない	☐	A
2 あなたは、学校が楽しいですか。 ①とても楽しい ②少し楽しい ③少しつらい ④とてもつらい	☐	
3 あなたにとって、中学校の生活におけるア～コはどうですか。 ア 信頼できる先生 ①たくさんいる ②少しいる ③あまりいない ④ほとんどいない	☐	B
イ 自分を信じてくれる（守ってくれる）先生 ①たくさんいる ②少しいる ③あまりいない ④ほとんどいない	☐	
ウ 勉強（家庭学習など）に取り組む態度 ①とてもよい ②少しよい ③あまりよくない ④とてもよくない	☐	C
エ 定期テストに取り組む態度 ①とてもよい ②少しよい ③あまりよくない ④とてもよくない	☐	
オ 友達関係 ①とてもよい ②少しよい ③あまりよくない ④とてもよくない	☐	D
カ 何でも相談できる友だち ①たくさんいる ②少しいる ③あまりいない ④ほとんどいない	☐	
キ 部活動の活動内容 ①とてもよい ②少しよい ③あまりよくない ④とてもよくない	☐	E
ク 部活動内の人間関係 ①とてもよい ②少しよい ③あまりよくない ④とてもよくない	☐	
ケ 学校の雰囲気 ①とてもよい ②少しよい ③あまりよくない ④とてもよくない	☐	F
コ 学級の雰囲気 ①とてもよい ②少しよい ③あまりよくない ④とてもよくない	☐	
4 あなたは、中学校の生活でつまずきを感じたことがありますか。 ①ほとんどない ②あまりない ③少しある ④たくさんある	☐	G
5 あなたは、中学校の勉強でつまずきを感じたことがありますか。 ①ほとんどない ②あまりない ③少しある ④たくさんある	☐	

資料1

中学校生活アンケート

このアンケートは、みなさんが中学校の一年目の生活にどのような思いをもっているのか、いろいろ教えてもらうものです。結果は、これからの中学校生活を充実させるために使います。

差し支えなければ名前を書いてください。 組 番 名前

チェックの仕方

1～5の質問に、下の(例)にしたがって、分が思っていることに一番近いと思うものを①～④から一つ選んで、右の□の中に番号を書いてください。

(例) あなたは、一人で東京へ行くことをどのように思いますか。

①とても楽しみ ②少し楽しみ ③少し不安 ④とても不安

2

1 あなたは、中学校の生活が楽しいと思いますか。

①とても思う ②少し思う ③あまり思わない ④ほとんど思わない

2 あなたは、学校が楽しいですか。

①とても楽しい ②少し楽しい ③少しつらい ④とてもつらい

3 あなたにとって、中学校の生活におけるア～コはどうですか。

ア 信頼できる先生

①たくさんいる ②少しいる ③あまりいない ④ほとんどいない

イ 自分を信じてくれる(守ってくれる)先生

①たくさんいる ②少しいる ③あまりいない ④ほとんどいない

ウ 勉強(家庭学習など)に取り組む態度

①とてもよい ②少しよい ③あまりよくない ④とてもよくない

エ 定期テストに取り組む態度

①とてもよい ②少しよい ③あまりよくない ④とてもよくない

オ 友達関係

①とてもよい ②少しよい ③あまりよくない ④とてもよくない

カ 何でも相談できる友だち

①たくさんいる ②少しいる ③あまりいない ④ほとんどいない

キ 部活動の活動内容

①とてもよい ②少しよい ③あまりよくない ④とてもよくない

ク 部活動内の人間関係

①とてもよい ②少しよい ③あまりよくない ④とてもよくない

ケ 学校の雰囲気

①とてもよい ②少しよい ③あまりよくない ④とてもよくない

コ 学級の雰囲気

①とてもよい ②少しよい ③あまりよくない ④とてもよくない

4 あなたは、中学校の生活でつまずきを感じたことがありますか。

①ほとんどない ②あまりない ③少しある ④たくさんある

5 あなたは、中学校の勉強でつまずきを感じたことがありますか。

①ほとんどない ②あまりない ③少しある ④たくさんある

資料2

中学校生活アンケート集計表(個人用)

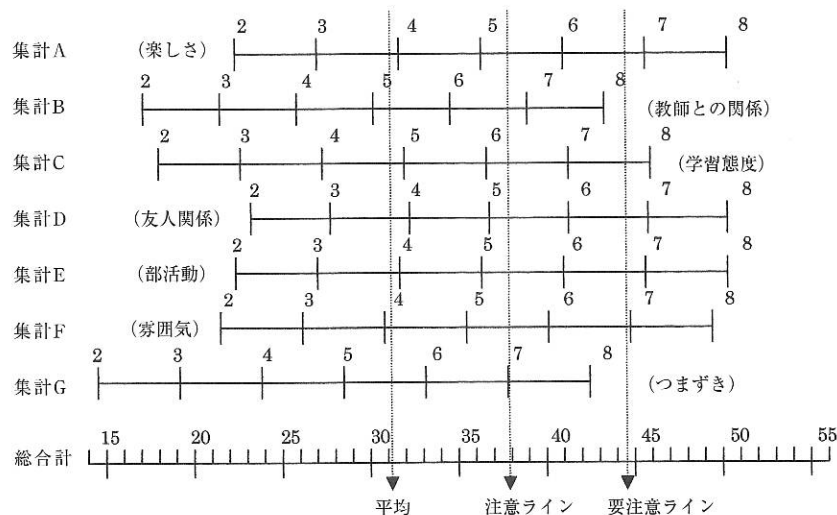
この集計表は、個人別プロフィールを描いて診断的な評価に使うものです。

個人別では、集計A～集計Gまでの合計点を右の目盛りで●印で記入し、線で結んでください。個人の特徴を表すプロフィールが描けます。

「注意ライン」は、100人中で16人にみられる(1標準偏差以上の)かたよりがある得点範囲です。

「要注意ライン」は、100人中で3人にみられる(2標準偏差以上の)かたよりがある得点範囲です。

学校名 組 番 名前



プロフィールの特徴：最も集計点が最も低かった領域と最も高かった領域の特徴等を見ます。

とるべき対策：問題点や改善の希望を生徒との話し合いで確認し、本書から対応策を選択します。

結果：対応策の結果、効果があればOK。効果が無ければ、もう一度「対策の見直し」を実施します。

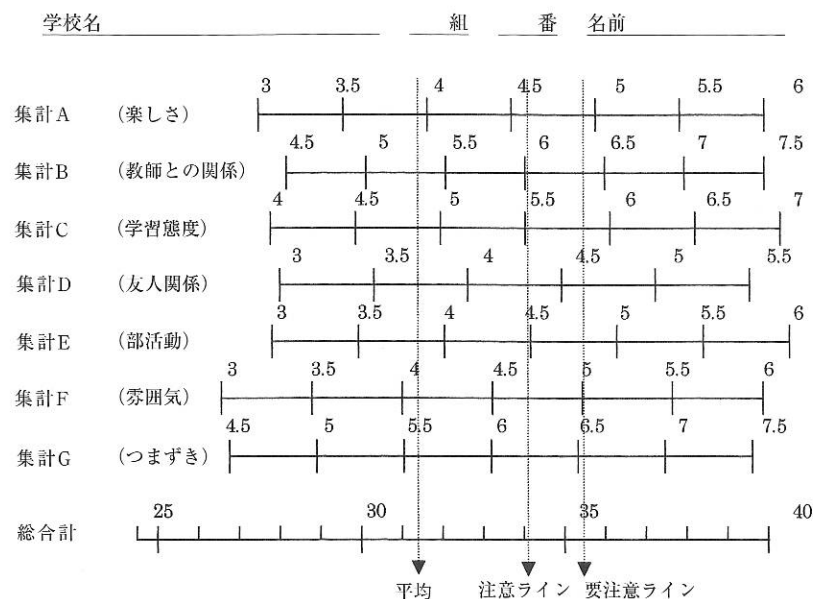
資料3 中学校生活アンケート集計表（30人学集団用）

この集計表は、学級集団のプロフィールを描いて診断的な評価に使うものです。

集計A～集計Gのそれぞれの平均値を右の目盛りに●印で記入し、線で結んでください。学級の特徴を表すプロフィールが描けます。注意ライン、危険ラインは30人学級を標準に設定しています。

「注意ライン」は、100学級中で10学級にみられる（10％水準で有意な）かたよりがある得点範囲です。

「要注意ライン」は、100学級中で1学級にみられる（1％水準で有意な）かたよりがある得点範囲です。



プロフィールの特徴：最も集計点が最も低かった領域と最も高かった領域の特徴等を見ます。

とるべき対策：問題点や改善の希望を生徒との話し合いで確認し、本書から対応策を選択します。

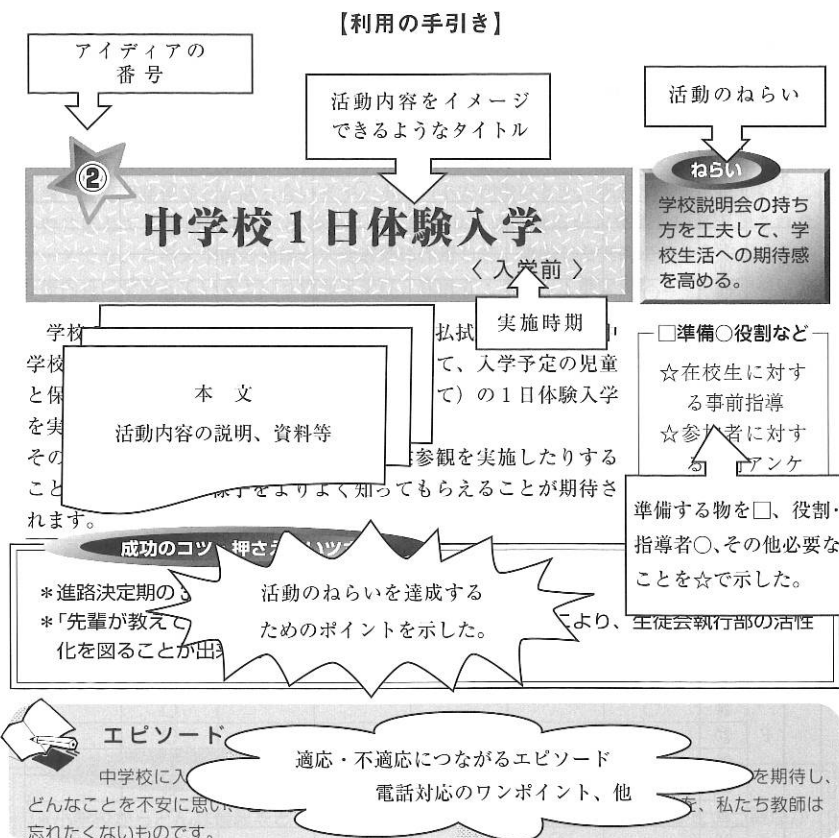
結果：対応策の結果、効果があればOK。効果が無ければ、もう一度「対策の見直し」を実施します。

(2) 適応指導のアイデアの使い方

本章の構成と利用の仕方は次のとおりである。

① 構成について

研究協力校における聞き取り調査から得られた実践事例をもとに、活動や指導・援助のあり方をモデル化したものを1ページ構成にし、適応指導のアイデア集としてまとめた。各アイデアの基本的な構成は下に示した「利用の手引き」のとおりとし、活動のねらい・内容・実施時期・その他必要な事項等を示した。また、随所にコラムを設けて生徒指導上の経験や指導事例を掲載し、教育実践を行う際のヒントが得られるようにしてある。



モデル化したものは全部で35あり、P29～63までに適応指導のアイデア集としてまとめた。目次（P2）に示すように、時系列に沿った活動におけるアイデアをア～ウに分け、それ以外のものをA～Gに分類してエとしてまとめた構成になっている。

② 利用の仕方について

P24にある「中学校生活アンケート」を実施し、P25～26の集計表をもとに現状を把握してから、アイデア集の中から対応策のヒントを得るようにする。この際、下に示した対応表を利用するとよい。集計A～Gを縦に読み、○印のある所で左に進むと、対応するアイデアの番号が示されている。必要と思われるアイデアが見つかったら、マニュアルとしてそのままの形で実践してもいいが、基本的には、さらに自分なりの工夫を加えていくものである。

対 応 表

アイデア		中学校生活アンケート集計表（個人用、30人学級集団用）						
区 分	番号	A. 楽しさ	B. 教師との関係	C. 学習態度	D. 友人関係	E. 部活動	F. 雰囲気	G. つまずき
ア	①		○					○
	②	○						
	③	○					○	
イ	④	○					○	
	⑤	○				○		
	⑥	○			○		○	
	⑦	○					○	
ウ	⑧	○					○	
	⑨				○		○	
	⑩	○					○	
エ	A ⑪	○			○		○	
	A ⑫	○			○		○	
	B ⑬		○					
			○				○	○
			○					
			○	○				
	C ⑱			○				○
				○				○
				○				○
			○	○				○
	D ㉑	○			○		○	
					○		○	○
	E ㉓					○		
						○		
	F ㉕	○					○	
		○					○	
					○		○	
			○				○	
							○	
オ	G ㉗		○					○
			○					○
								○
		○						○
	㉙		○	○	○	○		○
	㉚		○	○	○	○		○
	㉛		○	○	○	○		○

①

入学前の面接相談

〈2月〉

ねらい

特別な支援を要する生徒への理解を深める。

□準備○役割など

- ☆ 小学校からの情報収集
- 養護教諭
- 学年主任
- 教育相談係

小学校との連絡会で、入学直後から特別な配慮を要する生徒の情報を得た際、入学前に面接相談を行うことで、本人や家族の不安を軽減し、学校としての受け入れの心構えや具体的な準備ができる場合があります。

たとえば、LD児やADHD児は、教師や他の子どもの反応によって、二次的な障害が発生してしまうことが多いので、個々の生徒の実態とこれまでの指導・援助の方法を理解し、当面の学校の対応の仕方を考える必要があります。

具体的には、入学前オリエンテーションの後、「相談のある方はお残りください」という全体への呼びかけの中で、学校から事前に声がけをしておいた保護者と学年主任・養護教諭・教育相談係等とが話し合います。本人の不安が強いとか、実態が想像しにくいなど、必要に応じて入学前に生徒に直接会うこともあります。適応が大変難しいと予想されたケースでも、この入学前の面談が大変有効に作用して、適応した実例があります。また、心療内科に受診しているという情報を受け、保護者・本人の了解を得た上で、入学前に教師が医療機関に出向いて、学校としての対応について助言を得たという例もあります。

こうした入学前の面接相談を行う際には、次の点に留意しましょう。

- ・「差別」や「特別扱い」という不公平感や不信感が生まれないよう、全員を対象に面接相談に応じる用意があることを伝える場面を作ること。
- ・保護者に面接するときは、傾聴・受容・共感を肝に銘じて、まずは親の話に耳を傾ける。ひとしきり話が終わったら、ここまで育ててきたご苦労をねぎらう言葉をきちんと伝え、学校からの話はその後で初めて切り出すこと。
- ・生徒への面接は教師一人で行う。入学前に中学校の先生に自分ひとりで会うという緊張を共感的に理解して、一緒に校内を回りながらとか、保健室で簡単な手伝いをさせながらとかして、子どもの様子を観察しつつ、リレーションを作ること。

成功のコツ・押さえないツボ

- * 小学校からどんな情報をどのように集めるかを、入学後にどう生かすかという観点から、きちんと検討しておく。
- * 入学前の準備、入学直後の配慮の必要性を的確に判断する。
- * 配慮を要する生徒を中心に新入生の生徒理解のために、充分時間をとって全校職員の共通理解を図る。

②

中学校一日体験入学

〈入学前〉

学校の様子を早めに知ってもらい、不安を払拭するとともに中学校生活に期待を持たせることをねらいにして、入学予定の児童と保護者（必要に応じて小学校の担任を含めて）の一日体験入学を実施します。

その内容として、在校生を活用したり授業参観を実施したりすることにより、学校の様子をよりよく知ってもらえることが期待されます。

入学予定の児童に対して

小学校ごとに班編成をし、生徒会執行部が授業中の校内を案内します。その後、特別教室などで質疑応答に入りますが、この場の運営や質疑応答等は、生徒会執行部が中心となりすべて生徒で行います。

また、関心があるものの不安を感じている英語の授業の参観をしたり、実際に中学校の模擬授業を体験させたりする場合もあります。

保護者、小学校の担任に対して

学校側からの中学校生活の説明が主になりますが、事前に質問事項を依頼しておき、それに答える形で進行するとよいでしょう。アンケートを実施していれば、その結果報告も行います。

ねらい

学校説明会の持ち方を工夫して、学校生活への期待感を高める。

□準備□役割など

- 在校生に対する事前指導
- 参加者に対する事前アンケート（自由記述の質問を含む）の実施

成功のコツ・押さえないツボ

※進路決定期の3年生の学校生活に配慮する。

※「先輩が教えてくれる学校生活」のスタイルをとることにより、生徒会執行部の活性化を図ることが出来る。



エピソード ①

中学校に入学してくる生徒たちの心は、期待と不安でいっぱいです。どんなことを期待し、どんなことを不安に思い、どんな決心をしているのか、生徒の心を思いやる姿勢を、私たち教師は忘れたくないものです。

M和くんは、小学校時代、大変元気な子どもで、いたすらも多く、先生方の手を煩わせる存在でした。そんなM和くんでしたが、中学校に入学するにあたり、「今の自分を変えるんだ、他の人に迷惑をかけないように努力しよう。」と一大決心をしたのです。入学式当日、M和くんは、小学校時代には考えられないくらい落ち着いた行動でがんばりました。しかし、小学校からの引継ぎでM和くんのことを知っていた担任が彼にかけた言葉は、「ずいぶん無理してるんじゃないの。」

金髪で眉毛をそったM和くんが3年生の時、体育館裏で、自分が中学校生活をがんばれなかった理由として話してくれた出来事です。

③

上級生が行う中学校紹介

〈2月〉

ねらい

上級生から疑問に答えてもらい、中学校を理解する。

入学してくる生徒が抱く不安の最もよく理解者は、上級生かもしれません。どんな心配や疑問があったのか、実際入学してみてイメージと違ったのはどういうところか等、実感を伴った学校紹介を工夫してみましょう。ここでは、上級生の学習としての実践を紹介し

実践例1 小学校プレゼンテーション（総合的な学習の時間）

- ① 小学校6年生にアンケートをとって、中学校生活についての質問を募る。
- ② 6年生を中学校へ招待し、仮の兄弟クラスに入ってもらう。
- ③ アンケートの質問に中学生が答えることで、中学校への理解を深めてもらう。
- ④ その後、中学校1年の担任が小学校に行きまとめをする。

実践例2 学校紹介リーフレット（2年国語科「説明的な文章を書く」）

- ① 自分が入学前に抱いた不安や疑問を思い出し、質問の形でカードに書く。
- ② 質問カードを封筒に貼って回覧し、解答を書いて封筒に入れる。
- ③ 封筒をグループで分担して、読み手を意識して良い解答表現を検討する。
- ④ 各自、1枚のリーフレットを8面に折り分け、内側の6面にそれぞれ1つずつ、質問と検討した解答を丁寧に書き写す。
- ⑤ 表紙にタイトルと新入生名と自分の氏名を書き、裏表紙には歓迎のメッセージを清書する。
- ⑥ クラスごとに整理して、新入生の担任から一人一人に渡してもらう。

成功のコツ・押さえないツボ

※それぞれの学習の目標を明確にとらえておくこと。



エピソード ②

ある日、私はある用件で某中学校に電話をかけました。相手は席をはずしていたので、後でかけなおすことを伝えて受話器を置いたのですが、なんとなく憂鬱になってしまいました。

なぜかという、まず、電話に出た方が名前を名乗らなかった。忙しいのか、こちらの話をろくに聴かず、話し方がとてもぶっきらぼうだった。そして、最後に受話器を乱暴に置かれた。このような理由からです。

顔が見えなくても、電話はいろんなことが相手に伝わるものだと気付かされました。

私たち教師は、仕事上電話をよく利用します。なかでも、保護者の方々と電話で話をするのが非常に多いです。その時、自分はどういう電話応対をしているのか、今回の出来事とおして、私自身深く反省させられました。

④

入学式の演出

〈4月〉

従来の儀式的な部分を大切にしながら、新入生が中学校生活に明るい希望が持てる、中学生としての誇りが持てる、そして、この中学校に入学できてよかったと思える場面を、入学式に設定してはどうでしょうか。

その際にとくに心がけたいことは次の4点です。

- 上級生の手で作上げた場面であること（生徒会主催）
- 普段の学校生活の成果を盛り込むこと
- 新入生の不安と緊張をときほぐすものであること
- 時間的に長くないこと

演出の実践例として、下記のようなものが考えられます。

学校生活の取り組み	入学式での実践例
・文化祭等での全校合唱「ハレルヤ」	・上級生全員による、「ハレルヤ」の合唱の中を新入生が入場。
・吹奏楽部の活動 （その他の部活動による実践も考えられる）	・新入生が入場着席後、トランペットによるファンファーレと共にステージの幕が開き、吹奏楽部による歓迎の演奏開始。演奏終了後に開式の辞。
・特別活動等を利用し、兄弟学級生徒が、新入生一人一人に歓迎と励ましのカードを準備（書かれた内容は必ず点検）	・新入生代表挨拶終了後、兄弟学級の代表が、各クラスごとにカードを新入生一人一人に手渡す。

その他、学校の特色を生かしたさまざまな演出が考えられます。儀式的な部分とわけて二部構成にするか、従来の入学式の中に取り込むかも含め、検討してはいかがでしょうか。

成功のコツ・押さえないツボ

*新入生が中学校生活に明るい希望が持て、この中学校に入学できてよかったと思える場面を設定する演出を目指し、できれば学校の新しい伝統にしたい。

ねらい

中学校生活への希望と、中学生としての誇りを与える。

□準備○役割など

- ☆ 儀式的部分を大切に
- ☆ 実施にあたり、教師側と生徒側（生徒会）が綿密な打合せを行っておく

⑤

対面式と部活動紹介

〈4月〉

ねらい

生徒会と部活動について概要を理解させる。

入学式の翌日あたりの午後、体育館で2時間あまり時間をとって、対面式と部活動紹介を続けて行います。新入生を正面に迎え、上級生と対面する体形で始めます。

対面式の次第は次のようなもので、生徒会役員が進行します。

□準備○役割など

- 対面式指導（生徒会担当教師）
- 部活動紹介指導（部活動顧問）

新入生入場	（吹奏楽部演奏）
開会	（生徒会役員）
校歌（生徒会歌）斉唱	（生徒指揮・伴奏）
歓迎の言葉	（生徒会長）
生徒会組織の説明	（生徒会副会長）
各種委員会の説明	（各委員長）
中学校生活の紹介（寸劇）	（生活委員会の委員）
合唱	（2・3年生全員 生徒指揮・伴奏）
花束贈呈	（2・3年各学級委員から新入生各クラス代表へ）
新入生挨拶	（新入生代表）
校長挨拶	（校長）
閉会	（生徒会役員）

ここで新入生が退場し休憩を取っている間に、部活動紹介の準備をします。新入生から正面がよく見えるように場所を移動して、改めて生徒会役員が進行して開始します。

各部活動の紹介は、事前に時間と順番を指定しておきます。準備のあまり必要のない部活から始めるのがよいのですが、最初の部の調子が全体を左右することが多いので、明瞭にスタートできるよう顧問が特に指導をしておくことが肝心です。また、部と部の間が空かないよう、事前にリハーサルを行って機敏に移動させることも重要なコツです。

入学直後の生徒は、上級生の挨拶や合唱や説明の言動を目の当たりにすることで、中学生というものに実感をもちます。また、小学校にはなかった部活動の紹介には興味津々で臨むことでしょう。明るくはつらつとした雰囲気になるよう、花束や歌、寸劇やユーモラスなパフォーマンスなどで演出したいところです。

成功のコツ・押さえないツボ

*時間設定や移動のしかたなど、細かな打合わせと準備とリハーサルがきびきびとした動きを作る。生徒会役員や部長への指導が大切。

⑥

校内オリエンテーリング

〈入学後一週間以内〉

ねらい

中学校生活での具体的な行動が適切にできるようにする。

□準備○役割など

- カード
- ルール説明書
- 説明者
- ポイントごとの指導者
- 集合チェック者

野山で行うオリエンテーリングを、中学校の校地内で行うものです。ただの校内見学や校内探索ゲームではなく、当面の中学校生活で想定される場面においてどう行動すればよいのかを具体的に知るための活動にします。ともすれば聞く一方になりがちな入学当初、班行動で校内を自由に歩き回することは、緊張をほぐして楽しい活動になると同時に、中学生になってちょっと背伸びしたい子どもの気持ちにぴったりと添う、生活指導のチャンスです。それは、自分たちばかりでなく、いろいろな立場の人たちで学校が成り立っていて、自分もその一員であることを実感する、大切な経験になります。

具体的には次のように進めます。

- ① 学年集会で、ねらいとやり方の説明を聞く。
- ② 班単位で協力して校舎を回り、カードにあるポイントごとの問題を解いて記入していく。
〈問題例〉
「中庭の隅にあるゴミ捨て場の脇に立ててある看板には、何と書いてありますか。」
*技能士や調理員の方と相談して、清掃や給食など毎日の学校生活に欠かせないルールやマニュアルを全員が確認できる問題を作る。
「図書室にある『歳時記』（岩波書店）は全部で何巻に分かれていますか。」
*司書に図書室の利用マナーや調べ方などを指導していただくようお願いしておく。
「職員室で担任の先生の向かい側はどなたですか。時計の右の座席表で調べなさい。」
*教頭先生等に、入室のしかた等をその場で指導していただくようお願いしておく。
*上級生は授業中なので、廊下の歩き方や話し声などについて迷惑だった場合は、その場で他学年の先生から、きちんと指導していただくようお願いしておく。
- ③ 全てのポイントをクリアしたら、集合場所に戻ってチェックを受けてゴール。
- ④ 指定した時刻には全員集合し、学年主任のお話を聞く。

成功のコツ・押さえないツボ

- *学年外の教職員に活動のねらいと方法を伝え、それぞれの場にふさわしい中学生としての言動を、その場で具体的に教えていただくようお願いしておく。温かく、それでいて要求は厳しくして接することが、初発指導のコツ。
- *活動終了後、お願いした教職員に活動中の様子を伺うことが生徒の理解を深める。
- *最後の学年主任のコメントがツボ。次につながる評価を。

⑦

目標づくりは慌てずに、振り返りの場も

〈4月～年度末〉

ねらい

目標作成の過程を重視し、発表の機会を設けて行動につなげる。

「学級目標や学年目標は年度当初に立てなければならない。模造紙などに書いて教室の前面に一年間掲示しておくものだ。」という考えにしばられていないでしょうか？

学級目標や学級シンボルは、急がずにじっくり時間をかけて生徒に考えさせるのも一つの方法です。お互いを知り合い、学級や学校での生活に慣れさせながら作成させる。その過程に重きを置いた学級経営で、「全員の思いを表現して」「全員の手で」作ったという実感があれば、出来上がったものを身近なものと考えますし、目標達成に向けた姿勢をとることにつながります。

月ごとに学年目標を決めている学校では、各学級の目標がでそう6月から取り組んでいます。決定までの経過は、次の「1学年だより」のようにして全員に伝えます。そして、次の月の学年目標は前月の目標の反省をふまえて作成することになります。

1学年だより ○○中学校 6月○日 第○号

学年目標作成プロジェクト開始

中間テストも終わり、部活動も本格化してきて、1年生も○中の1年生として頑張っています。いよいよ学年目標を作る段階にきたように思います。学級委員を中心とした学年生徒会の大きな仕事として取組み始めました。

各学級の学級目標を持ち寄り、学年生徒会が原案を作成し、各学級から意見を吸い上げ、学年総会を開いて決定していく予定です。遠足の実行委員会では行事の成功のために頑張りましたが、今度はこれから1年間の生活の基盤になる目標作りです。取り組む過程を大切にしながらも、良い学年目標が決定できるようにしていきたいです。右に各学級の学級目標を載せています。

以下略

オラほのスローガン！となりのクラスは？

□準備○役割など

- 模造紙、マジック、ダンボール、発砲スチロール、ペットボトル、他

また、学年集会や生徒集会で各学級の目標やスローガンを発表し合う、ということもあります。年度末にも、学級ごとの達成度について発表会を設けますが、いずれも、各学級から4～5人程度の代表が出てプレゼンテーションをします。さらに、目標やスローガンを様々な形の掲示物にして教室に掲げ、修了式の折に生徒・保護者の目にとまるように展示します。掲示物の作成作業は丁寧に行わせ、自分の学級の作品（目標）に誇りが持てるように指導することが肝要です。

成功のコツ・押さえないツボ

- *年度末の発表会が形式的なものにならないように、月ごとに達成度について反省する機会を設ける。

⑧

兄弟学級の活用

〈 通 年 〉

ねらい

生徒自身による、
自主性と指導力向
上をめざす。

年間行事の中に兄弟学級による縦割り活動を取り入れ、2年生、3年生の力を借りながら生徒の自主性を育てていく取り組み例を次に示します。

行 事	ね ら い	目指す生徒像	活動主体
4 月 あいさつ運動	・ 明るい校風をつくる。 ・ 実際に大きな声であいさつすることを経験する。	・ 場面をとらえ、誰に対しても大きな声であいさつができる生徒	学 級
5 月下旬 応援クラスマッチ	・ 1 年生をまじえた応援体制をつくる。 ・ 声を出す経験を十分に積む。	・ 3 年生のリーダーシップのもと、みんなで大きな声が出せる生徒 ・ 割り当てられた時間に精一杯取り組める生徒	兄弟学級
9 月初旬 市連合運動会	・ 兄弟学級での取り組みを結集し全校集団のものとする。	・ 全校という大きな集団の中においても自分の精一杯の力を出しきる生徒	全 校
9 月下旬 体育祭	・ 兄弟学級の自主性を尊重し、「させられる」活動ではなく、「する活動」の深化を図る。	・ 学級や兄弟学級の計画のもと、自主的に主体的に競技や応援に取り組める生徒	兄弟学級
11 月初旬 文化祭 ・ 合唱・全校制作 ・ フォークダンス ・ 地域文化 等	・ 合唱の取り組みをとおして、学級の自主的な活動をする。 ・ 一人ひとりの意欲を大切にする。	・ 学級の取り組みを自ら考え、自主的に継続して取り組める生徒	学 級
1 月下旬 進路激励会	・ 3 年生の進路希望の実現を激励する。 ・ 新年度の学年リーダーを育成する。	・ 3 年生のこれまでの活動ぶりを手本とし、意欲的に応援活動に取り組む生徒	兄弟学級

成功のコツ・押さえないツボ

* 「先輩を尊敬する後輩、後輩を大切にする先輩」の良き関係づくりを目指す。

⑨

宿泊学習で学級組織づくり

〈 5 月 〉

ねらい

班編成の仕方を工夫し、学級活動を活性化させる。

2泊3日程度の宿泊学習を利用することにより、班の編成替えを行なって学級組織を固めることができます。

「生活班」に加えて、学級活動全般に係る仕事を担当する「学級活性班」を設け、学級内の役割分担がうまくいくようにします。下の〈企画書〉は、人数が9人の学級におけるモデルを示したものです。生活班は3人ずつの3班（A～C）編成とし、各班が3つの学級活性班のいずれかを担当することにします。

〈 合宿前 〉

年度当初は、男女混合の生活班の編成だけを行っておきますが、班編成をすることの意味（各自が自分の力を発揮して住みやすい学級を作るため、係を決めることで仕事の分担ができる、等）を十分に考えさせます。班ごとに座席をまとめておいて話しやすい環境を作り、宿泊学習で行う話し合いの資料（班の活動企画書等）をあらかじめ配っておきます。また、合宿前に、生活班内でどの係を希望するかの調査もしておきます。

〈 企画書 〉

学級活性班	朝 読 書 班			学 習 班			美化・掲示班		
学級のために する仕事の内容 ・実施時間等									
	⇕			⇕			⇕		
生 活 班	A			B			C		
生活班の各係	班長	副班長	○△係	班長	副班長	○△係	班長	副班長	○△係
自分や自分の 班のためにする 仕事の内容									

〈 合宿中 〉

生活班の編成替えを行ってから、どの学級活性班を選択するかを決定します。次に、上の企画書をもとにして、班ごとに仕事の内容や役割分担について話し合い、企画書を作成した後に発表会を設けます。

成功のコツ・押さえないツボ

* 話し合いをさせるにあたっては、担任の指導方針をはっきりさせておくことが必要だが、「方向付け」をし過ぎないこと。「担任の思い通りにさせられた」という気持ちになり、主体的な活動につながらないことがある。

* 企画書を作成する段階での指導、発表会の持ち方。

10

応援クラスマッチ

〈 7月 〉

学級への帰属意識と学級の結束を高めることを目的にして、「我がクラスの応援」を発表会・学級対抗形式で行います。2学期に運動会や合唱コンクールが予定されていれば、それに向けた事前準備・事前指導を兼ねることができます。また、1学期期末テスト終了後から終業式までの間の「空白期」の指導にも役立つことでしょう。

実施日を終業式の前日に設定し、期末テストが終了してから各学級の準備や練習に充てる場合の準備日程例を、実際の事例もとに右の囲みに示しました。

学級ごとにアイデアに富んだ応援を考えて発表するのもよいでしょうし、シンプルに声の大きさや学級のまとまりが見られれば、それもよしとしましょう。大事なのは、学級の「総意」とそこに至る「過程」です。必要以上に「創意」にこだわる必要はありません。手段が目的にならないようにしましょう。担任の創意・工夫が全面に出すぎると、生徒の達成感が弱まります。

発表内容は、普通のエール、工夫したエール、応援歌、パフォーマンス、それらの組み合わせ等が考えられます。学級の全員がステージに上がることを条件とし、学級の一体感を持たせるようにするといいいでしょう。各学級の持ち時間は3～5分程度にし、冗長にならないようにする配慮が必要です。

発表会の次第（例）

- | | |
|-------------------|--------------------|
| 1. 開会 | 4. 発表 |
| 2. 応援団長の激励 | 5. 生徒会長のあいさつ（ねぎらい） |
| 3. 審査員の紹介と審査基準の確認 | 6. 閉会 |
- 審査結果の発表と講評（校長先生）は、明日の終業式に行います。

成功のコツ・押さえたいツボ

- * 全体の企画や審査基準の作成にあたっては、生徒会執行部や応援団など生徒代表の意見や考えを尊重し、教師主導にならないように配慮する。
- * 審査員の選出にあたっては、生徒に不公平感が残らないようにする。
- * 発表中の教師の会話には特に注意が必要である。発表内容の良し悪しや学級間の比較につながるような発言は厳禁。発表までのプロセスを前向きに評価するような会話であれば、生徒の信頼感が増すはずである。

ねらい

学級への帰属意識を高め、学級の結束を強化する。

準備日程例

- 6/17
執行部、応援団、担当教員の打合せ
- 6/25
生徒集会で趣旨説明
- 7/3～4
期末テスト
- 7/7～7/22
準備・練習
- 7/23
発表会
- 7/24
終業式

11

一人一人が活躍する場面の設定

〈 4月～ 〉

ねらい

自己有用感を高める。

集団づくりの第一歩は、各自が役割をもつことです。学級活動における係活動は、「自分はみんなの役に立っている。自分は必要とされている。」という実感（自己有用感）を育む大切な場面です。生徒が活躍できるように、生徒会の委員会活動とも連動させて、次のような係活動を設定することができます。

- ・各班に保健係を一人ずつおいて、朝の会の冒頭に起立し、班員の名前を一人ずつ呼んで健康状態を記入して報告させ、保健係長が集約するシステムにする。
- ・各班に集配係を一人ずつおいて、毎朝生活記録ノートを集めて職員室まで運んでもらう。さらに班員の提出物のチェックを任せ、忘れ物を注意する役割を与える。
- ・各教科係を二人ずつおき、終りの会で翌日の持ち物や宿題を、一人は側面黒板に書き、もう一人はみんなに口頭で呼びかけることにする。
- ・終りの会の日替わりメニューとして、月曜は生活係からの呼びかけ、火曜は図書係から本の紹介、水曜は体育係からストレッチ運動、木曜はレク係による合唱、金曜日は全員輪番の新聞記事紹介などとしておく。

成功のコツ・押さえたいツボ

- * 小さなことでよいから、できるだけ多くの生徒が「必要な存在」となる活動場面を設定する。
- * 日常の学級運営がスムーズにいくことを同時に目的としないように。



エピソード ③

Fくんは、入学当初から喫煙やバイクの乗りまわし、校舎内での暴力行為や器物破損、授業抜け出し等、問題を抱えた生徒でした。

そんなFくんでしたが、本人の良さや複雑な家庭事情を知っていた担任のY先生は、問題が起る度にFくんをかばいました。他の先生方から、「指導が甘すぎる」とたびたび非難を受けましたが、意に介することなく、授業の空き時間はほとんどすべて、授業を抜け出して構内をうろつくFくんを探しだして、話をしたり聞いたりしていました。

「先生、Fとどんな話をしているんですか。」ある日、私はY先生に聞いてみました。「特別なことは何もなし。まあ、自分の昔話をしながらFの愚痴を徹底的に聞いて、あとは、何があってもおまえを信じる、と言いつづけていることぐらいかな。」

その後、時間はかかりましたが、Fくんは見事に立ち直り、卒業していったのです。

12

生徒主体の学年朝会

〈年間定期〉

ねらい

自己有用感を高め、リーダーを育てる。

□準備○役割など
○学級委員会

定期の学年朝会（例えば第3月曜日の朝）は、各学級委員が内容を企画し運営することになります。担当教師の指導はもちろん必要ですが、できるだけ学級委員の生徒が考えた企画にそって援助したいものです。自分たちの実態を見つめ、よりよい学年にするための自主的な活動を体験させる機会とします。

企画の段階では、年間計画を立てたり各回の具体的な内容を決めたりする話し合いを通して、全体を見通す力や発想力、構成力を伸ばすことができ、リーダーを育てるよい機会です。

事前の準備の段階でも、会場使用の許可や用具のセット、プリント資料の作成や配布などを通して、社会的な実践力を身に付けることができます。

また当日は、進行・挨拶・報告・説明などを担当することによって、場に応じた表現力も育ってきます。

短時間であっても定期的に継続することで、多くの生徒にそれぞれ活躍の場を与えることができ、自己有用感を高めることができます。また、各行事の実行委員会等や生徒会活動での企画や運営の基礎を築いていくことにもなります。

学年朝会が終わったら、担当教師だけでなく担任や学年主任も、ねぎらいや勇気づけの言葉を忘れないようにしたいものです。「ご苦労様、大変だったなあ」、「バッチリだったよ」、「準備の甲斐があったね」など、工夫や努力の過程を認める言葉によって、生徒は達成感を味わい自信を深めていきます。

ただ、入学当初、やる気ばかりでリーダーに立候補し、集団の前に立ってうまくいかなかった体験から、不適応を起こす生徒も少なくありません。ですから、担当教師はよく観察した上で、役割分担によっては個別に指導する必要があります。さらに、うまくいかなかったときには、丁寧にフォローしなければなりません。

学年朝会で実際に行われている内容は、生活面の見直しや応援練習、各委員会の報告などが多いようですが、他にもいろいろな工夫が可能です。委員会の活動に関らせて本の紹介や体ほぐし運動、行事に関らせて合唱発表や集団作りゲーム、あるいは各学級目標の発表や学年全体の話し合いなど、生徒主体の活動の場としてさまざまに活用できるでしょう。

成功のコツ・押さえないツボ

- *教師がやったほうが簡単で上手いくが、下手でも手をかけるからこそ力がつく。
- *準備や練習で、教師は時に「壁」になってやる。
- *人前で恥をかかせないだけの個別指導をするのは教師の責任である。

13

日課にそった指導体制づくり

〈通年〉

ねらい

節度ある学校生活を送らせ、生徒との信頼関係を築く。

□準備○役割など
☆職員どうしの声かけ

職員室にこもらず、できるだけ生徒と共に行動し教室や廊下等でこまめな声かけをすることが、個々の生徒とのリレーションづくりにつながります。問題行動の早期発見・早期対応・未然防止は言うまでもなく、「できたことや良い行動をほめる」ことが自尊心を育てることになります。また、とりとめもない会話から生徒の様子を知ることできます。「先生から信頼されている」という気持ちを持たせることができれば成功です。

このような指導体制をとることで、教師集団に対する信頼感が増していきます。下のよう、日課にそった具体的な指導プランを作成し、全校で組織的な指導を行います。

実践した学校からは、「教師間の連携が進んだ」「担任が朝の会と終わりの会を大事にするようになった」、などの声が報告されています。

日課にそった職員の動き ○○中学校			
8:15	登校	学担 担外 週番	・教室で生徒を迎える。まだ登校していない生徒の把握。 ・玄関及び廊下で生徒を迎える。 ・玄関で生活委員会（週番）指導。
8:20 8:30	朝自習		・打合せと朝自習指導。 ☆朝の会の開始時間に遅れないように、打合せもポイントをしぼる。
8:30 8:40	朝の会	学担	・出席および健康確認。職員室黒板に記入し、出席簿を所定の位置に。 ・貴重品（集金等）は預かる。 ・欠席生徒から連絡がない場合は、早急に連絡を取る。
8:50 11:40	授業	教担	・チャイム前に教室に向かい、声かけをしながら、チャイム着席を守らせる。 ・生徒の学習態度について、日立つところは学担へ報告。 ・終わりの時間を守る。 ☆次の時間が空き時間の先生は、できるだけ廊下等で生徒との会話を。
中 略			
16:05 17:45	部活動	顧問	・出欠の確認。 ・活動には顧問がつくことを原則とする。 ・終了時間を厳守する。 ・用具の後片付けをきちんと行い、生徒が下校するまで確認を。生徒を残したまま顧問だけ帰ってこない。
18:00	完全下校	学担 日直	・帰る前に自分の教室に足を運ぶ。 ・下校を放送等で促しながら、施錠と巡視。

成功のコツ・押さえないツボ

- *管理や監視の姿勢が強くと、逆に生徒の不信感を増幅することがある。
- *不用意な一言に注意！ 培った信頼関係を一瞬にして崩してしまうことがある。

14

教師と生徒のバリアフリー

〈全校朝会時〉

全校朝会時に、校長や教師が講話を行うことはごく普通に行われていますが、この実践は、講話の内容があくまでも教師の自己開示に基づいているところに特徴があります。加えて、図書館司書や事務職員、技能士を含めた教職員全員が話をする、ということが大切です。ただし、教員以外の方で、話したくないという方に無理強いすることは避けましょう。

〈基本的な考え方〉

- ① 生徒に心を開くことで、生徒も心を開くだろう。
- ② 正直に自分を語ることで、生徒も自分を正直に語るだろう。
- ③ 生徒に自分の生き方を示すことが、生徒の生き方探しや進路選択のヒントになるだろう。

自分たちの先生は、これまでどのような人生を送り、どのような考えをもっているのか、生徒は強い興味を持っています。教職員が自身の体験を基にした話を生徒にすることにより、生徒自身の自己開示や生き方探し、教職員と生徒との信頼関係づくりが促進されます。このことは、生徒にとって、中学校生活を送るにあたっての大きな力になるでしょう。

講話の内容としては、以下のようなものが考えられますが、各人が個性的なテーマを設定するのがより効果的であると考えます。

〈講話の内容例〉

自分自身の中学校時代を振り返りながら

- 自分に大きな影響を与えた先生、友人について（出会い・思い出 等）
- 夢中でとりくんだこと（趣味・スポーツ 等）
- 進路選択で悩んだこと（どのように進路を決定したのか 等）
- 友人関係で悩んだこと（いじめからの脱出体験 等）
- 勉強方法の工夫（苦手教科の克服法 等）

内容は多岐にわたりますが、生徒の共感や気付き、そしてやる気につながるよう、より具体的にプラス思考の話をすることが大切です。

成功のコツ・押さえないツボ

- * 自慢話や卑下する内容にならないよう留意する。
- * 自己開示のしすぎに注意する。

ねらい

教職員の自己開示により、生徒との信頼関係を作る。

□準備○役割など
☆教職員の講話計画

15

生徒を語る学年部会

〈年間定期〉

ねらい

生徒理解を深める。

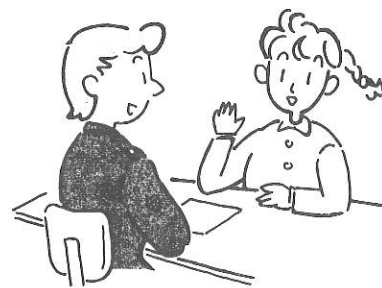
定期的に行う学年部会ではさまざまな協議題があって、その時々にしせまった内容があると思います。しかし、そうであってもメニューの中に必ず個々の生徒を語る時間をとることにしておきます。各担任からクラスの状況や気になる生徒について話してもらったあと、他の先生からの意見を出し合います。

中学校の教科担任制では一人の生徒を多面的にとらえることができます。担任からは問題と思われる行動も、他の先生から見れば全く違う価値をもってとらえられることもあります。枠組みを変えて見直す（リフレーミング）と、その生徒に対する理解が変わり、理解が変われば感情が変わり、感情の変化で対応が少し違ってくるものです。

生徒を語るときは、できるだけエピソードで語りましょう。どんな時に何と言ったのか、どんな表情でどういう行動をとったのか、具体的な場面を語れるのはその場にいた教師だけです。そして、それを聞いた他の教師は、その生徒の気持ちやなぜそういう言動をとったのかを考えます。こうした、言動の裏にある感情や意図、要求や期待をキャッチすることが共感的理解です。直接向き合っている教師には見えないものが、こうした語り合いで見えてくることもしばしばです。

その上で具体的な対応について、必要なら役割を分担し、一緒に指導・援助していくことを確認します。できれば副主任が進行し、主任がリーダーシップを発揮していく形が望ましいと思います。

なお、具体的な対応を考えるときには、生徒指導の三機能（自己存在感を与える。共感的人間関係を育てる。自己決定の場を与える。）を念頭におけば、間違った対応にはならないでしょう。



成功のコツ・押さえないツボ

- * 決して担任批判にならないようにする。困った状況を率直に語ったことで、実際に学級がよくなったという経験が、学年の協力や団結を強くし、同時に個々の教師の指導力を高めていく。

私的な会話を多く

〈いつも〉

総合的な学習の時間や選択教科などで、教室や学級という枠を越えて、各自が調べたりまとめたりする学習活動が増えました。そうすると、授業中に教師と生徒が一对一で話す機会がぐんと増えます。これが、生徒との間にリレーション（信頼関係）を作る絶好のチャンスです。そして信頼関係の第一歩は、一人一人の生徒への好意的な関心を示すことです。

「前の時間は欠席だったね。入学したばかりで気を張ってたから疲れたのかな。」

「野球の練習見学してたけど、野球部に入るつもり？」

「〇〇町から通っているんだってね。遠くて大変でしょう。」など、個人的な内容で、しかも共感的に話しかけます。

また、「〇〇についてとても詳しく書いてあるね。どうやって調べたの？」というように、聞かれた質問をすることで生徒の話を引き出すこともできます。

私的な会話を多くするには、学級担任としてあるいは教科担任として、日常の観察や学習作品を手がかりにして、誰がどういうものに興味をもっているのか、何が得意なのか、今苦労しているところはどこなのかを理解するように努めます。それが、それぞれの生徒との話の糸口になるからです。そして、私的な会話を交わすことで生徒が「先生は自分のことをよく見てくれている、関心をもっていてくれる」という思いを実感することで、信頼関係が深まります。

成功のコツ・押さえないツボ

*私的な会話が特定の数名とだけなら、全くの逆効果。信頼関係はおろか、学習の邪魔にしかならないことを肝に命じる。



エピソード ④

ある日の昼休み、職員室の私のところにクラスのT雄くんがやってきました。T雄くんはどちらかというと勉強が苦手で、生活態度も決してよいとは言えない生徒です。でも、明るく思いやりにあふれる性格で、クラスの人々からとても好かれている存在でした。そんなT雄くんが、いつもは来たがらない職員室に来て、真剣な顔で目の前に立っています。「どうかしたのか。」という私の問いに、T雄くんは次のことを言って、職員室から出て行ったのです。「先生、学校って勉強だけするところなんですか。人としての生き方も教えてくれるところじゃないんですか。」

その後、いつもどおりに振舞っていたT雄くん。彼に何があったのか、結局、彼は話してくれませんでした。私が生徒に対し、よくも悪くも人として生きていくモデルを、自己開示により示し始めたのは、このT雄くんの言葉を聞いてからです。

個々の生徒と教師との信頼関係を作る。

□準備○役割など

□生徒一人一人への好意的な関心

□情報収集

○学担・教担

一目でわかる1年間の学習

〈4月〉

めあてを持って主体的に学習に取り組めるようになる。

最初の授業で、教科ごとに年間学習指導計画（A4判縦書きで1枚）と評価の仕方や観点を書いたプリントを配布し、十分な説明をします。また、授業で配布されるプリント類や点検を受けたレポートなどといっしょに、教科ごとに用意したファイルに綴じさせておくなど、見通しを持って学習に取り組めるように工夫します。

□準備○役割など

□教科ごとのファイル

〈年間指導計画の例〉

平成〇〇年度 数学科 年間指導計画（1年） 年間授業時数105時間

月	時間	単元（時数）	指導内容	時数	配慮点
4	6	I 正の数と負の数 (17)	1 正の数と負の数 ・反対の性質をもつ数量の表し方 ・正の数と負の数、自然数	2 1	・負の数の必要性を感じ取らせ、正の数と負の数の意味を理解させる。
中 略					
6	12	II 文字と式 (15)	1 章の問題 ・練習問題 1 文字と式 ・文字を使った式 ・文字式の表し方	4 2 2	・文字を用いることの意義を身近な事柄と結びつけながら理解させる。

また、勉強の方法がわかると学習に興味をもち、自ら進んで取り組むようになるでしょう。自分にあった学習の仕方を見つけてさせるための手立てとして、「学習の手引」を作成して活用している事例があります。各教科とも、「学習の心構え」「学習のすすめ方」の2部構成を基本にして、2～4ページにわたって解説することになります。

〈「学習の手引」の構成例：数学の一部を抜粋〉

学習の心構え

1. 「数学は面白い！」この一瞬を大切にしよう。わかった喜びが、自分の考えを確かなものにし…

学習のすすめ方

- 授業の受け方 (1) 数学では結果のみでなく、それが出てくる過程を考える。
ア. 問題を解くことは、結果だけ覚えるのではなく、数学の仕組みや…
- 復習の仕方 (1) 数学では、毎日の復習の積み重ねが学力を確実なものにする。それが…
ア. 教科書やノートを開いて、内容の要点を整理し、問題をもう一度…
- 評価の項目 (1) 定期テストや小テストなどの点数 (2) 授業の準備（チャイム着席、…

成功のコツ・押さえないツボ

*生徒に配布する年間学習指導計画は、教師用のものであっても特段問題はない。生徒用のものを作る手間をかける必要はないし、むしろ、指導上も同一のものがよい。

*学習の手引は、生徒の実態に照らし、研究を続けて改訂を加えていくことが望ましい。

家庭学習ノートの活用

〈 通年 〉

家庭学習用のノートを準備させ、その点検を通して自主的な学習を促すことがあります。このノートに「自学ノート」と名づけた実践を紹介します。具体的には次のような仕方と留意点を持って指導をすすめていきます。

- ① 朝の会で「自学ノート」を提出させ、担任がコメントを書いて終わりの会で返却します。
- ② 全員強制ではないが、ノートの提出とコメント記入には力を入れます。提出を義務付けにすると、出すこと自体が目的になってしまいがちです。
- ③ 教師の点検が成功のポイントです。ノートの表紙に合格シールなどを張ってやり、励みにさせるとよいでしょう。

「親もこのノートのことを意識している様子が見られます。こんな会話があるんですよ。」と紹介してくれた先生がいました。

親「今日、『自学』した?」、生徒「うん、した」

ノートは学習のみならず、親と子そして生徒と先生の会話の場・話し合いのきっかけにもなるのです。

成功のコツ・押さえないツボ

- * 「全員を対象にして毎日」と考えると取組む前に苦しくなる。数グループに分けて提出日を変えるなど、継続できる方法を考えることが必要である。
- * 英単語の練習や数学の計算等、学習の跡を残すためのノートなので、教科のノートとは区別して一人一冊だけ持たせるとよい。



エピソード ⑤

丁子さんは社会の地理が好きでした。しかし、好きで一生懸命努力するけれど、点数が取れませんでした。おとなしい彼女は、そのことをとても悩んでいましたが、誰にも相談することができないでいたのです。

そんな彼女に、教科担任のN先生は気付きました。ある日、廊下でN先生が「丁子、おまえが地理を好きなこと、そして努力していることを先生は知ってるからな。先生はいつでも応援しているよ。」と声をかけてくれたそうです。

今、丁子さんは、外国の大学で日本語を教える教師になり、活躍しています。数ヶ国語を操り、休暇にはヨーロッパ各国を自由に飛び回っています。

そんな丁子さんが言います。「あの時、N先生の言葉がなかったら、私の人生は違っていったと思います。N先生のような教師になることが、私の目標です。」

自主的な学習を促し、話し合いのきっかけを得る。

- 準備 ○ 役割 など
- ノート (生徒用)
- シール、点検印、等 (担任用)
- ☆ 担任の根気

テストに向けてのチェックカード

〈 テスト前 〉

基本的な学習方法を知り、学習習慣を身に付ける。

中学校での最初の定期テストの前には、担任から、テストの形式や問題量、出題内容、テスト後の処置、結果の通知方法などについてのガイダンスが必要です。加えて、ガイダンスの後、学年共通に次のものを準備して中学生にふさわしい学習のしかたを丁寧に指導していきます。

(1) テストに向けての家庭学習内容一覧

各教科担任から協力してもらって、テストに向けて家庭でやるべき勉強内容を順序だてて一覧表にします。このとき、何をどうすればいいのか、できるだけ具体的に書いてもらいます。繰り返しが必要なものも、順序の中に入れて一覧にします。

(2) テストに向けての家庭学習計画表とチェックカード

各教科ごとにA4判程度の大きさの厚紙を用意し、表に、テストまでの日程が時間ごとに区切ってある白紙の計画表(家庭学習計画表)を、裏には、毎日の反省や、各教科の学習時間を記録するチェックカードを貼ります。二週間前には計画ができるように指導し、全教科のカードをリングでまとめ、毎日持参させます。そして、チェックカードは毎日担任が点検して返します。

生徒自身による学習状況のチェックと同時に、教師の点検方法が生徒のやる気を左右します。生徒の様子を観察しながら、生徒の現在の実力も加味し、工夫のある点検を心がけたいものです。

家庭学習内容一覧の例

国 語	社 会
① ワークP4の漢字をノートに書いてみて、かけない漢字を練習する。	① 教科書P5～9をよく読む。
② 範囲の文章にある難語句のノートを見直して意味を覚える。	② ワークP2～6を解いて丸付け。
③ 授業で使った学習プリントをもう一度見直し、空欄に書いたことをよく考える。	③ もう一度①をする。
④ ワークP5～8の問題を解き、答え合わせをする。	④ ワークP7～9を解いて丸付け。
⑤ ワークの問題でわからないところを先生に質問する。	⑤ 重要語句をカードに書き出し、
⑥ ①をもう一度する。	⑥ ⑤を繰り返しめくって重要語句の意味を覚える。
* テスト後漢字練習ノート提出のこと。	* テスト後ワーク点検

成功のコツ・押さえないツボ

- * 次第に自分で学習計画を立てて実行できるように、まず基本的な勉強の仕方を共通に指導する機会とする。
- * できるだけ具体的に示し、テストにもその努力が反映するように出題する。

20

生徒へのステップアップメッセージ

〈 随時 〉

ねらい

生徒の学習意欲とやる気を喚起し伸ばす声がけを心がける。

ステップアップメッセージを有効に行うためには、各生徒の理解度・習熟度を的確に把握していることが必要です。どれだけ生徒を把握しているか、教師自身がいまずそのことを確認しておきたいものです。その上で、個別にメッセージを発信することになります。

次に、そのメッセージは生徒にとって具体的であり解決可能な、スモールステップのものでありたいものです。課題を並べ立てて生徒を追いつめるようなことは絶対にさけないものです。また、生徒の状況の変化に伴ってメッセージの内容も変化させます。生徒の学習意欲や自ら動き出そうとする気持ちは常に変化します。生徒に伝えたメッセージによって、生徒にどのような変化が生じたか、その変化を決して見逃してはいけません。生徒の立場にたったメッセージを心がけます。

I メッセージを使うなど、伝え方は様々です。大切なのはメッセージに「お前はできるんだ……」等、生徒に伸びてほしいという教師の思いが入っていることです。ごく一般的なメッセージを大勢に向かって発信しても、残るのは教師の自己満足だけでしょう。

※ I メッセージについてはP56をご覧ください。

成功のコツ・押さえないツボ

- * 生徒をよく観察し、各生徒の理解度・習熟度、そしてその変化を的確に把握する。
- * 理解できないことを生徒のせいにならず、教師の教え方に改善すべきところがないのか、謙虚に考える姿勢を持つ。
- * 担任と教科担任間の情報交換を密にし、常に連携がとれる状態にしておく。



エピソード ⑥

U先生は目立つことが嫌いで、どちらかというとおとなしく控えめ、大声をあげている姿も見たことがありません。そんなU先生ですが、生徒からの信頼は絶大でした。「生徒に甘いだけなんだ……」と陰口を言う先生もいましたが、生徒のU先生評は、次のようなものでした。

U先生は「嘘をつかないし約束を守ってくれる」「自分が悪いときは謝ってくれる」「教師の面子よりも生徒のことを優先してくれる」「悪いことは悪いとはっきり言ってくれる」「怒るときも生徒の人間性を否定しない」「どうすれば生徒がわかるか、毎回工夫した授業をしてくれる」「名前を覚えてくれて必ず名前が声で書ける」「答案に必ず励ましの言葉を手書きで書いてくれる」「どんなに忙しくても話を聴いてくれる」等々。

あたりまえのことをあたりまえにやる大切さを、U先生と生徒たちに教えられました。

21

構成的グループエンカウンター

〈 毎月1～2回 〉

ねらい

自己理解・他者理解を深める。

学級づくりは5月までが勝負です。その間に教師と生徒とが心を開いた関係を築くことが肝要です。心を開くための一つの手法として「構成的グループエンカウンター」があります。学級開きの時期に下記のようなエクササイズを行い、その後もねらいに応じて継続的に実施していくと、自己理解・他者理解が深まり、学級にあたたかい人間関係が生まれてきます。

年度当初に共通理解を図って、学級活動や道徳など月1回程度の割合で授業の中に取り入れることにしておきます。初めに、研修会に参加した教師にリーダーを務めてもらって、職員全員で演習しておくとういでしょう。ショートエクササイズを職員会議の冒頭に行えば、話し合いも活発になります。

さて、学級で行う具体的なエクササイズとして、「学級づくり スタートダッシュ 中学校編」(諸宮祥彦他 編著 図書文化)には次のようなものが紹介されています。

□ 準備○役割など

□ エクササイズに必要なもの(振り返り用紙など)

○ リーダーは原則として担任が務める。

4 月前半 《ねらい：出会いを大切に》

「指相撲」、「ジャンケンチャンピオン」、「凍り鬼」
(身体を使った集団遊びのようなエクササイズ)

4 月後半 《ねらい：団結力を高めよう》

「新聞紙バズル」、「協同絵画」、「サッカージャンケン」、「宝探し」
(班の仲間と協力する楽しさを味わうエクササイズ)

5 月前半 《ねらい：友達づくりを始めよう》

「探偵ごっこ」、「4つの窓」
(無理のない自己開示のエクササイズ)

5 月後半 《ねらい：自己を見つめ、仲間のよいところを見つめよう》

「いいとこさがし」、「マジカルほめ言葉」
(互いのよさや個性を認め合えるようなエクササイズ)

学年ごとにねらいとエクササイズを決めて行い、実践資料をCD-ROM等に収録しておけば、次年度に活用することができます。

成功のコツ・押さえないツボ

- * まずは職員全員で演習を行い、共通理解の下、学校全体で行う。
- * 実践を記録に残すことで、成果が積み上げられていく。

22

Q-Uで学級診断

〈5月・10月・2月〉

「Q-U (QUESTIONNAIRE-UTILITIES)」とは河村茂雄教授が開発した「楽しい学校生活を送るためのアンケート」を用いて行う、学級診断方法です。教師の日常観察や面談で把握する生徒理解を補って、生徒の内面を理解するためのものです。アンケートは10分程度で答えられるもので、集計・分析すると、座標上に「学級生活満足群」「非承認群」「侵害行為認知群」「学級生活不満足群」の4領域に、生徒一人一人が点として示されます。これによって、学級集団の状況を把握できると同時に、早速に対応を考えなければならない生徒をピックアップできます。

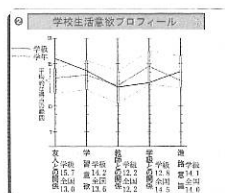
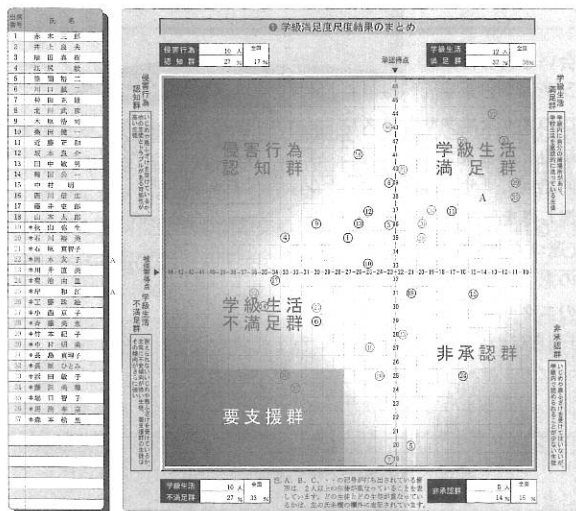
Q-Uで大事なことは、実施したら必ず何らかの対策をとることです。時を見計らって言葉かけをするとか、個別面談をするとか、班編成に配慮をするといった行動を教師がとることで、調査の意味が生徒にも伝わります。

ねらい

生徒個々の内面を知り、学級集団の特徴を把握する。

□準備○役割など

□「Q-U」(中学生版) 図書文化社(1部100円)の購入
○学級担任



診断コメント
学級生活満足度の結果について
学級生活満足度の結果は、学級生活の満足度を示す指標の一つです。学級生活満足度の結果は、学級生活の満足度を示す指標の一つです。学級生活満足度の結果は、学級生活の満足度を示す指標の一つです。

要支援群	要支援群
氏名	氏名
1 田中 太郎	2 山田 花子
3 佐藤 一郎	4 鈴木 一郎
5 高橋 一郎	6 渡辺 一郎
7 中村 一郎	8 村田 一郎
9 山本 一郎	10 佐々木 一郎
11 田村 一郎	12 山崎 一郎
13 水野 一郎	14 山田 一郎
15 山田 一郎	16 山田 一郎
17 山田 一郎	18 山田 一郎
19 山田 一郎	20 山田 一郎
21 山田 一郎	22 山田 一郎
23 山田 一郎	24 山田 一郎
25 山田 一郎	26 山田 一郎
27 山田 一郎	28 山田 一郎
29 山田 一郎	30 山田 一郎
31 山田 一郎	32 山田 一郎
33 山田 一郎	34 山田 一郎
35 山田 一郎	36 山田 一郎
37 山田 一郎	38 山田 一郎
39 山田 一郎	40 山田 一郎
41 山田 一郎	42 山田 一郎
43 山田 一郎	44 山田 一郎
45 山田 一郎	46 山田 一郎
47 山田 一郎	48 山田 一郎
49 山田 一郎	50 山田 一郎

成功のコツ・押さえないツボ

- * 集計、分析した座標をもとに、学年の教師集団で具体的な対応策を話し合う。
- * 事前に手引きを熟読してから実施する。
- * 日頃から教師と生徒個々との信頼関係を形成しておく。

23

部活動を決定するまで

〈年度当初〉

ねらい

生徒に負担がからず、納得して活動できることをめざす。

生徒にとって、部活動は学校生活の中で大変重要な地位を占めています。部活動は、運動部であれ文化部であれ、自分の活躍できる場、個性を伸ばせる場、人間関係を学ぶ場です。しかし、一歩間違えば不適応を生み出す場でもあります。それだけに、入部に当たっては、具体的な資料を配布したうえで、部活動についてのオリエンテーションを実施し、生徒に十分な見学時間と入部を検討する時間を与えたいものです。

□準備○役割など

□「部活動紹介」のオリエンテーションの補助資料
□「部活動を定めるまで」の生徒配布用の具体的資料

○部活動のオリエンテーション

これは、どの学校でも生徒会主催で実施しているものと思いますが、実施にあたっては、次の点に留意したいものです。

- ・運動部と文化部を同等に扱うこと
- ・各部の発表が楽しさだけに流されず、具体的な活動状況が新生徒に伝わるようにすること
- ・事前に顧問が発表内容をチェックすると同時に、顧問も参加して、顧問としての部活動の指導方針を発表すること

○『部活動を定めるまで』の具体的な資料

とくに、次の点は明確に生徒に伝えたいものです。

- ・部活動の意義
- ・学校として、部活動で目指すもの
例：中学校の部活動は「向上心・協調性・礼節を重んじた人間教育」を目指します。
- ・部活動を定めるにあたっての具体的な注意事項
- ・入部までの具体的な日程
例：部活動見学期間(時間)・仮入部期間・希望調査日・正式入部日
- ・仮入部・正式入部の手続きの仕方
- ・仮入部後に、部を変更しなければならぬ時の手続きの仕方
例：①部顧問から「仮入部カード」を返してもらう。

- ②新しく参加したい部名を書く。
- ③担任に点検印をもらう。
- ④新しく参加する部顧問に提出する。

成功のコツ・押さえないツボ

- * もし、新入部員数に偏りが生じたり、活動に支障をきたす入部者数になった場合は理由を公表したうえで、躊躇せずに仮入部期間を延長し、生徒各自に再考させる。
- * 入部までの流れは保護者にも知らせて、理解と協力を得る。

24

任意加入の部活動

〈 通年 〉

部活動の全員加入制は、生活指導上の問題への対応という側面が強く出すぎると、課外活動の趣旨を生かすという側面が見えにくくなります。部活動をしたくなければなくていい、という考えではなく、他にしたいことや継続して活動したいもの（ピアノ、体操、水泳等）があればそれを優先にしていなのだ、というのが任意加入制の趣旨です。

その趣旨を理解してもらうためには、生徒に対して趣旨に則った丁寧な指導をすることとあわせ、保護者に対して、個々の生徒の興味・関心や才能を活かすための方策であることを、集会や文書を通じて十分に説明する必要があります。また、それ以前に職員会議で、部活動の意義や指導方針、任意加入になった場合に予想される状況・課題（顧問や部員の数、活動場所等）などについて、十分協議することが不可欠です。また、移行までの段取りも具体的に日程を詰めないと、安易な選択に流れたり学校への不信を招いたりしかねません。

〈 任意加入制にした学校での話 〉

数年前から任意加入制にしているが、全員加入の時に比べると活動意欲が高まった、と総括されている事例があります。入部していない生徒は、地域のスポーツクラブで活動している生徒がほとんどで、そう多くはない。これらの生徒については、希望により、中体連の大会にも参加を認めている。引率も行う。



エピソード ⑦

男子バレー部の新入部員に、〇くんという、とても小柄な生徒がいました。副顧問をしていた私は、監督のS先生に言いました。「〇くんの体格では、バレーボールを続けるのは大変ではないかと思うのです。本人のために転部を勧めませんか。」

S先生の言葉は次のようなものでした。「先生、本人のためを思うのであれば、ぜひバレー部でがんばってもらいませんか。〇くんがバレー部でがんばってくれることが、もしかしたら、他の部員に試合で勝つこと以上のよい影響をもたらすかもしれませんよ。それに、なんと言っても、〇くん自身がバレーボールが大好きだと言っているじゃないですか。」

返す言葉がありませんでした。〇くんのためと言いながら、結局は、勝敗にこだわっている自分に気付かされたのです。卒業まで小柄なままの〇くんでしたが、3年間立派に部活をやり遂げました。

ねらい

個々の生徒の興味・関心や才能を活かす課外活動にする。

□準備○役割など

☆ 部活動のあり方に関する全職員の共通理解

☆ 保護者に対する十分な説明

25

校内の雰囲気づくり

〈 4月〜 〉

ねらい

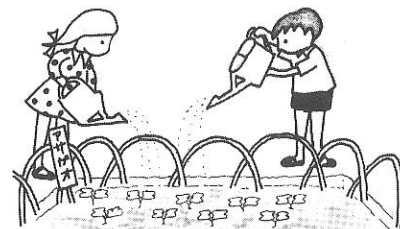
よりよい学校の雰囲気を作る。

子ども達が抱く学校のイメージは、先生や友達・先輩といった「人」だけでなく、校舎や校庭の造り、掲示物やトイレの状態など、「物」から受ける印象によっても相当に変わります。小学校の明るく楽しそうな雰囲気に慣れ親しんできた子ども達にとって、中学校の整然と落ち着いた雰囲気は、とすれば暗く冷やかな印象を受けるかもしれません。

活気があって明るく、それでいて知的で情緒豊かな雰囲気の学校であれば、小学校とは違った「大人になる学校」として、成長のはずみになることでしょう。

そんな雰囲気をつくるために、それぞれの学校でいろいろと工夫を凝らしています。ここでは美化や掲示物に関する取り組みをいくつか紹介しましょう。

- ・ 広報係を中心に、寄贈された絵画やモニュメントの他、各教科の学習作品や委員会の取り組み、あるいは各種ポスターなどを、構成を考えて分野や部門ごとに整理して掲示する。
- ・ 運動会で作った学級旗や美術、技術・家庭の授業で作った作品を展示している。
- ・ 美術部員が壁をペンキできれいにし、古い校舎が明るくなった。
- ・ 物が壊れると、技能士さんがすぐに対応して修理してくれる。その姿を見て、生徒も校舎を大切に使うようになった。
- ・ 昇降口の階段にプランターを設置し、技能士さんとPTAの環境部の方々が、季節ごとに花を植えてくれる。毎日の手入れは生徒会の美化委員会が行っている。
- ・ 階段踊り場のコーナーや学年黒板脇に小さな台を置いて、花瓶に花を挿す。花を飾ると不思議に、チョークや埃などが気になったり、掲示物や床に落ちた紙屑にも目がいくなるようになる。



成功のコツ・押さえないツボ

- * 掲示物は全体を見渡して、計画的に行うことが必要。
- * 花の名前を話題にしたり、作品へのコメントを添えることが生徒の心を豊かにする。
- * しおれた花や掲示物の剥がれや破れなどを、そのまま放っておかないこと。

26

こだわりの教室環境整備

〈 随時 〉

人間にとって生活環境を守ることが大切のように、生徒にとっては、教室環境が整っていることはとても大切なことです。教室の掲示物を見れば、その学級の雰囲気というものが見えてきます。

担任は、自分の学級の教室環境整備について、きちんとこだわり（方針）を持つことが必要です。そのこだわり方は、担任それぞれでよいわけですが、同時に、生徒にも教室環境整備に対するこだわり（プライド）を持たせることが大切です。

教室環境整備を行う上で大切なポイントは、次の3つです。

・自分の学級の教室環境は、ほかの学級と違うぞ！

それは、一つのプライドといってもよいでしょう。「自分の教室環境は、ほかのクラスと違ってすごいんだ」という意識を生徒に持たせることが、生徒のやる気や学級のまとまりの向上につながります。

・この教室環境は、自分たちで作上げたんだ！
・いつも新しい情報が掲示されているよ！

生徒の手による教室環境整備であるということが大切になります。教師があれこれ指図して教室環境整備を行っていくのではなく、生徒達が、自分の頭や手を使ってやったんだ、と思えることが大切です。このように思えることが、生徒のやる気や学級のまとまりにつながるでしょう。

掲示物で大切なことは、張りっぱなしや記入忘れといった、変化のない掲示物にしないということです。掲示方法の工夫も含めて、常に最新の情報を掲示したいものです。

また、教室環境整備については、小学校の実践例が参考になります。校種にこだわらず、よいものは取り入れるという、柔軟な姿勢も必要です。

成功のコツ・押さえないツボ

- * 教師のこだわりとは、教師の個人的趣味ではない。生徒と協力しながら一緒に作り上げていくことを忘れないこと。
- * 学年で共通に掲示するものについては学年会等で話し合い、教室内での掲示場所や方法を統一しておくことが望ましい。

ねらい

生徒のやる気を喚起する教室環境をめざす。

□準備○役割など

- ☆ 教室環境整備に対する教師のこだわり（方針）
- ☆ 教室環境整備に対する生徒のこだわり（プライド）

27

班替えでの留意点

〈 4月〜 〉

ねらい

班替え時の不適応を防止する。

生徒にとって班替えは学校生活の中で最も身近で切実な関心事のようです。それは、学習や話し合い活動だけでなく、清掃・給食などの日常活動の多くが班を単位として行われるため、誰と一緒の班になるかによって、「学校生活の楽しさ」が大きく左右されるからです。

班替えについてはさまざまな方法があって、一概に善し悪しは言えません。例えば、「くじ引き」は、個々への配慮が難しいし、各班の質が異なって指導や集約がしにくくなる可能性が高くなりますが、学級の実態によっては、活動を通して互いに意外な面を発見し他者理解が深まる可能性もあるでしょう。班長の決め方にしても、投票で先に決める方法は、信頼のできるリーダーが選ばれ、選ぶ側の責任を体験的に学べますが、輪番で全員が班長を経験する方法では、責任ある役割を体験することで、自尊感情を高めたり、信頼を得てリーダー性を伸ばす生徒も出てきます。

ですから、班替えの方法は、担任の学級経営方針に基づき、学級の実態に応じて選ぶということになります。ただし大切なことは、年度当初に、班の意義、班編成の基本的条件（男女・数・席）、班替えの時期などについて、担任の考えをはっきりと生徒に伝え、それを具体的な場面で貫くことです。

しかし、どんな方法であっても、特に配慮を要する生徒に対しては次のような指導をする必要があります。

- ☆ 座席の位置に関して担任が指定する。
 - ・視力、聴力など健康面、あるいは身体上の支障がある場合
 - ・不登校だった生徒が再登校を始めた段階（後ろの入り口近く）
- ☆ 班のメンバーに関して、本人から意向を聞いておき、できるだけ実現させる。
 - ・「学校生活アンケート」などで、友達との関係に、介入が必要とされる程の不安を感じている生徒
 - ・不適応の兆候（活力の低下、腹痛等の訴え、遅刻、早退、欠席、成績の低下など）が見られる生徒
- ☆ 不公平感や疎外感を抱いていないか、表情や言動をよく観察する。

成功のコツ・押さえないツボ

- * 学級経営方針は、公の言葉によって伝わるのではなく、班替えなどの具体的な場面での言葉やトラブルが起きたときの対処の仕方などによって伝わっていく。

28

生徒に投影する教師の人間関係

〈いつも〉

ねらい

教師同士の人間関係を生徒に投影させる。

生徒の観察力の鋭さは舌を巻くほどで、黙っていても実によく「先生」の姿を見抜いているものです。そしてまた、職員室の人間関係にも驚くほど敏感です。良きにつけ悪しきにつけ、中学生にとって「先生」は生き方のモデルになっています。ですから、生徒に「認め合う仲間」や「あたたかい人間関係」を求めるばかりでなく、教師同士の人間関係が生徒に投影することに思いをめぐらせましょう。

例えば、朝の学年打合わせで教師同士の誕生日にささやかな花束を贈ることにしていた学校で、生徒同上も誕生日を祝うようになったそうです。

あるいは、生徒から他の先生への不満を訴えられたときの対応によって、教師の人間関係が直接生徒に響くことがあります。まさか一緒に悪口を言う教師はいないでしょうが、迎合したり対立したりしかねません。

梁瀬のり子さんの「育てるカウンセリングが学校を変える 中学校」を参考にとすると、こんなときには、「話は聞くんが、同調しない」を原則にするといようです。不満を口にする生徒は、その気持ちを否定せずに聞いてやるだけで、気が済むことが多いものです。一通り聞いて、「～ことが不満なんだね」と受け止めてやるのが先決です。その上で、生徒には見えていないその先生の良さ（熱意や努力）を伝えましょう。いくつかの質問によって相手の真意や本音を考えさせることも効果的です。その際、「私は～思う」とIメッセージで伝えると、押し付けになりにくいものです。

しかし、もしも生徒の言い分にもっともだと感じる場合は、率直にその教師に改善をしてもらうことも必要です。なかなか勇気のいることですが、そうしたことは生徒にも要求している関係でしょう。

中学校はいろいろな持ち味をもった教師がチームを組んで教育を行う組織です。互いのよさを認め合う共感的な人間関係の中で、同じ目標に向かってそれぞれの役割を果たしていこうとしています。担当が学級事務の事務的なことを進んでして下さることで、担任は生徒に付くことができますし、担任が夜遅くまで生徒のために苦勞している姿を伝えることができるのは、担任以外の先生しかいません。また、時には議論を交わして指導方法を改善することで、共に実践的指導力を高める教師集団でありたいものです。

*「Iメッセージ」とは、①子どものどんな行動が、②自分にどんな影響を与え、③そのため自分がどんな感情になっているか、の3点を、「わたし」を主語にして子どもに伝える方法。「あなた」を主語にすると非難のメッセージとなるが、「わたし」を主語にして述べると、相手が受け入れやすいとされる。

成功のコツ・押さえないツボ

* 生徒に求める人間関係は、教師の人間関係の投影の延長にある。

29

すこやかネットワーク

〈年度当初〉

ねらい

非行を防止して、青少年の健全な育成を図る。

中学生になると学区が広がり、先輩を含めて交友範囲がぐっと広がります。郊外型の大型店舗の進出などで地域全体が様変わりすることも珍しくありません。こうしたときに懸念されるのが万引き、自転車盗等のいわゆる初発型非行の増加です。

重大な非行を犯した子どもたちの大部分は初発型非行によって社会的規範を逸脱することを「学習」してしまったことを考え、万引きや自転車盗等の防止に努める必要があります。

県警察本部では、県内8地区で非行防止のネットワーク事業を実施しています。中学校区を一単位に、小・中学校、家庭、地域住民、公民館、営業者等がネットワークを築いて、小・中学生の規範意識と地域の健全育成機能を高めていこうとするものです。

具体的な活動としては、警察の方を講師にした生徒向け薬物防止教室、保護者向けの子育てに関する講演会、中学生と地域の方々との懇親会、巡回指導や有害ビラはがしなどをしています。

こうしたネットワーク事業によって、犯罪件数が激減したという報告があります。

このような警察の事業を受けなくとも、PTAの生徒指導活動、地区班会、地区の子供会、交通安全指導体制、公民館活動、小中連携の会など、現在各学校が持っている組織を活用すれば、同様のネットワークを作ることが可能です。

□準備○役割など

☆ 警察・地域の
商店街・地域
の子ども会・
町内会などと
の連携組織

成功のコツ・押さえないツボ

- * キーパーソンを決めて現在の組織をつなぎ、とりあえずネットワークを立ち上げる。顔を合わせて知り合いになる。それぞれ異なる立場でやっていることを情報交換する。そして、具体的な活動を継続すること。
- * 開かれた学校づくりの一環としても有効な視点。



エピソード ⑧

教職について間もないある日の放課後、生徒のいない教室で教材準備に熟中していたら、突然、廊下から「先生さようなら」という声がきこえました。顔をあげてみると、部活が終わって帰ろうとするクラス的女子生徒です。「さようなら。気をつけて帰れよ。」と、私は自然に返しました。彼女が卒業して最初のクラス会の時、中学校時代の嬉しかった思い出として彼女が真っ先に語ったのは、「あの時、先生は仕事を中断し、顔をあげて私に挨拶をかわしてくれました。それがとっても嬉しかった。」でした。あの時のごく当たり前の挨拶が、5年の月日が過ぎてなお彼女には鮮明に残っていたのです。

彼女の言葉で、私は、初心を忘れて生徒と対応している現在の自分に気付かされ、深く反省させられました。

30

相談はいつでもどこでも誰とでも

〈 通年 〉

学級の生徒の相談に応じたり適切なアドバイスを与えたりすることは、担任の大事な仕事のひとつです。しかし、場合によっては、担任には話しにくいことや相談しにくい悩みごとを抱えてしまうこともあるかも知れません。責任感が先に立つため、そのような場合でも担任は一人ですべてを抱え込もうとしてしまいます。しかし、そのことが逆に生徒には満足の得られない結果をもたらす場合があります。このような事態を避けるために、次のような工夫が考えられます。

- ① 担任に話しにくいことがあれば、主任・副担任・相談員などに気軽に話せる雰囲気、生徒にとっても先生にとっても相談しやすい雰囲気を学年全体で作っておく。
- ② 「相談ポスト」を用意しておき、下記のような申し込み用紙(参考例)に書いて投函する仕組みを作っておく。相談のための間口を広げることをねらったものです。

相談申込用紙

年 組 氏名 _____
 相談したい時間…… 昼休み・放課後
 (どちらかに丸をつけてネ！)

あらかじめ相談内容を
 書かせないとかが
 ミソ。そのほうが投函
 しやすいのです。

- ③ 教育相談室の場所にも工夫が必要です。昇降口に近いところ、職員室や教室に行く手前など、生徒が入りやすいと思われる場所に相談室を設けたら、相談に訪れる生徒が増えた例があります。

相談の窓口を増やすことは担任を支援することになり、結果的には生徒を支援することにつながります。生徒の視点に立って、彼らのために機能する相談態勢を調えることが求められます。

成功のコツ・押さえないツボ

- * 合言葉「相談は、いつでも、どこでも、誰とでも」を忘れずに。
- * 自分以外の先生に相談した、ということで、自分の領分が侵されたとか、自分の力量が足りない、などと考えないこと。
- * 相談ポストのセキュリティが保たれるように、細心の注意を払う。

ねらい

生徒の気持ちに立ち、相談しやすい
 仕組みを整える。

□準備○役割など

- ☆ 担任団の共通理解
- 相談ポスト
 セキュリティーが保てるものを用意する。
 一度でも生徒の信用を失うと、以後、二度とこの試みは機能しない。
- 相談申込用紙
- 校内の施設

31

定期教育相談

〈 1学期半ば 〉

ねらい

教師と生徒とのリ
 レーションをつくる。

□準備○役割など

- 「定期教育相談のころえ」
- アンケート

学級担任が学級全員に個人面接相談を行うには、まず、学校の教育相談の係が中心となって企画し、全校一斉に終りの会の後を面談時間として10日間程度設定します。事前に人間関係、学習、校内外の生活、家庭生活等の項目についてアンケートを行い、それを基に面談をします。

この時間のねらいは、教師と生徒の心の開かれたリレーションづくりです。「先生に相談していいんだ」「この先生に相談すると、よく話を聞いてくれて、ほっとする」というような気持ちを子どもに持ってもらうことです。

そして、次のような「定期教育相談のころえ」を教員全員が共通に理解して臨みます。

- ① この時間は、教師と生徒のリレーションづくりに徹する。時間も短いのであまり大きな問題には取り組まない。叱責の必要がある場合でも、その時間はそれを避ける。
- ② 面接時間は10～20分程度に設定し、どの生徒も同じ長さにする。話すことのない生徒の面接時間を短くしたりすると、その生徒は「自分は大切にされていないのでは」という思いを与えて、いざというとき相談してくれなくなってしまう。
- ③ もっと時間が必要だと思う生徒も、同じ時間で切る。別の時間にもう一度話を聞きたいことを伝え、次の面接の約束をする。
- ④ 基本的に秘密は守る。面接で話したことは誰にも言わないことを原則として面接を行う。他の教師にも伝えたほうがよいように判断される内容の話があった場合、そうしていいか、必ず本人の確認をとっておく。
- ⑤ あまり話すことがなさそうな場合は、趣味のことや休日の過ごし方など、たわいもないことを話してもらう。こういう無駄道から案外その生徒を理解するのに有益な情報が手に入るものである。
- ⑥ 「君はいつも笑顔を絶やさないね」など、他の生徒のいる前ではなかなか言えないポジティブなフィードバックを与える。
- ⑦ もし何か気になることがある場合、「あなたの～が気になっているんですが、もしよかったら、少し話してみてくださいませんか」と率直にこちらの気持ちを伝え、丁寧に誘いかける。

諸富祥彦 著『学校現場で使えるカウンセリングテクニック』より

成功のコツ・押さえないツボ

- * 欲張りすぎて余計なことを生徒に話させてしまうと、その後の関係により影響を及ぼさない危険性が高いことを心にためる。

32

心の整理箱

〈毎月1回〉

ねらい

心の健康を維持する。

心に抱える不安やもやもやとした感情を整理し、心の健康を維持することをねらって、自分の心を見つめて整理する時間を設定します。学級担任の生徒理解を深め、生徒の内面にある問題の早期発見・早期援助にもつながります。

具体的な方法は次のとおりです。

- ①毎月1回、終わりの会を5分延長して行う。
- ②無記名で、用紙の枠の中に不安やもやもやを書き入れていき、心の中を整理させる。
- ③生徒が記載した内容については秘密を厳守する。
- ④実施後、学年部会で実施した結果について語り合い、学年における生徒理解を深める。
- ⑤相談希望のある生徒には、迅速に対応する。

※否定的な内容が書かれていても許容し、書くことで否定的な感情を発散しているとらえる。

※白紙であっても許容し、強制的に書かせるようなことはしない。

□準備○役割など

□「心の整理箱」のプリント

心の整理箱

※名前は書きません

① 心の整理箱

②

③

④

☆今の気持ち

.....

.....

.....

☆相談したいときは書いてください

◇自分の名前 ()

◇相談したい先生

担任の先生、() 先生、どの先生でもよい

実施マニュアル（教師の指示）

今日は、みなさんの心に浮かんだ悩みやイライラなどをいろいろだして、気持ちの整理をしましょう。今からすることは、テストや検査ではありません。楽な気持ちでやってください。

〈心の整理箱のプリント配布〉

今配っている用紙には、箱が四つ書いてありますね。その箱の中に今からいろいろ入れていきます。では、始めます。

- ① 軽く目を閉じて、楽にしてください。机に伏せたほうがよい人は、伏せてもいいです。

〈間をとる〉

楽になりましたか。今、膝のあたりは、どんな感じですか。

〈間〉

今、おなかのあたりは、どんな感じですか。

〈間〉

- ② では、自分のことをふり返って、気になることや困っていることはいかなあつと、考えてみてください。何か浮かんできましたか。浮かんできた人は、鉛筆を持って、一番の箱に書きましょう。

33

自分のよさを知る

〈通年〉

ねらい

自分のよさについて理解を深め、自己肯定感を高める。

誰でもよいところを持っているし、よいところをほめられると嬉しいものです。また、他人からほめられるというのは、うれしいだけでなくもっと大きな効用があります。自信がつき、今まで気づかなかった新たな自分を発見することで自己理解が深まったり、ほめてくれた人への関心や理解にもつながったりします。しかし、そのよいところに、なかなか自分では気がつけないのも、また現実です。

そこで、生徒と接する際に、意図的に生徒自身のよさを取り上げた声かけを心がけたり、生徒同士が互いのよさを出し合って、認め合う時間を設定してはどうでしょうか。設定する時間は、特別活動等の時間が望ましいですが、朝の会や終わりの会、給食の時間を利用することも考えられます。具体的な実践方法としては、自己理解・他者理解をねらいとする、構成的グループエンカウターのエクササイズを行うことが考えられますが、エクササイズを単発で実践するのではなく、複数のエクササイズを組み合わせたプログラムを作成して実践することが望ましいです。構成的グループエンカウターについては、アイデアの②④を参照してください。

次に示したのが、自分のよさや友達のよさに気づき、認め合えるエクササイズ例です。

いいとこ四面鏡・いいとこインタビュー・私はだれでしょう・Xからの手紙 等

『私たちは自分を好きであるときほかの人を好きになり、自分を大切にしているときほかの人も大切にできる』※1とあるように、人間関係づくりには「自分が好き」という自己肯定感が重要です。この取り組みは、自己理解を深め、人とかかわりの中で自己有用感を育て、自己肯定感を高めます。これは同時に、他者に対しても肯定的に理解しようとするにつながり、他者肯定感も高めます。さらには、互いに認め合える心と心の交流やふれあいのあるあたたかい人間関係がある集団、また、子どもたち一人一人が素直にありのままの自分を表すことができる集団、メンバーから受容され自分の居場所がある集団、つまり、あたたかい人間関係のある学級づくりにもつながるのです。

構成的グループエンカウターの実践にとどまらず、「友達の弁論から、その人の考えのよさや今まで発見しなかった部分を発見したり、考え方を学んで自分の財産にしよう。」ということで、「いいとこさがし」を学級弁論大会と関連させて実践している学校や、道徳の授業の中にエクササイズを導入して、自己肯定感の向上を目指している学校もあります。

※1『好ましい人間関係を育てるカウンセリング』より 手塚 郁恵 著 学事出版 1998

成功のコツ・押さえないツボ

※否定的な表現については、上記のようにとらえるようにしても、学級担任の気持ちが減ってしまうことがあるので、学級担任へのフォローが必要。

34

生活アンケートの活用と生徒理解職員会議

〈 定期 〉

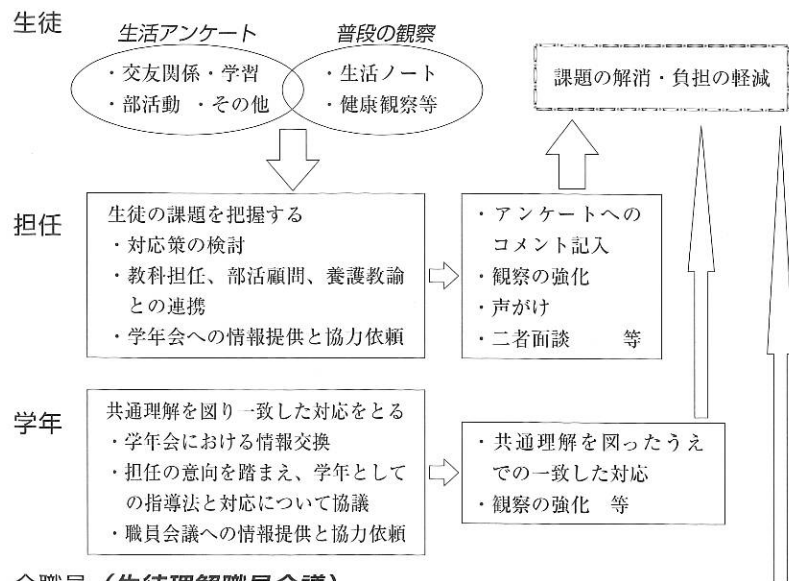
本研究の「中学校生活アンケート」と生徒理解職員会議を連携させることで、全職員が共通理解に立ち、生徒の課題解決に向けて対応するものです。これは、担任が一人で問題を抱え込んでしまうのを防ぐことにも有効です。ともに定期的の実施し、アンケートの実施と返却はすべての学年が同じ日に行なうこと、生徒理解職員会議はすべてに優先して必ず実施することが重要です。

ねらい

生徒の課題を早期に把握し、共通理解に立った対応を図る。

□準備○役割など

□本研究の「中学校生活アンケート」



全職員（生徒理解職員会議）

- ・生徒の課題について全職員による共通理解を図る。
- ・担任と学年団の意向を踏まえ、指導や対応の方向性について協議する。
- ・全職員による共通理解を図ったうえで、一致した対応をとる。
- ・担任と関係職員の連携確認と必要に応じたプロジェクトチームの結成。

成功のコツ・押さえないツボ

- * 学校規模が大きい場合は、学年単位で会議をもって対応することも考えられる。
- * 生徒理解職員会議は、がんばっている生徒を認めていく場でもありたい。

35

個別の教育相談的かかわり

〈 随時 〉

ねらい

生徒とのかかわり方に、教育相談の考え方を導入する。

「先生は自分のことをどう見てくれるのだろう。」「先生に相談に行ったら、相談にのってくれるのだろうか。」入学したての生徒たちにとって、中学校の先生はこわい存在に思えるものです。先生方が自分たちとどのようなかかわりをもってくれるのか、生徒たちの心は、不安と期待でいっぱいです。

そのような生徒たちとのかかわる際に、教育相談的なかかわりを実践することをお勧めします。

〈 教育相談的かかわり方のポイント 〉

- 生徒を理解しようとする姿勢（生徒への積極的な関心）
 - ・子どもの発達課題を理解する。
 - ・生徒の気持ちを思いやる。
 - ・話をしっかりと聴く。
- 生徒を認めようとする姿勢（自尊感情、自己肯定感の向上）
 - ・生徒のよいところを見つけ認める。
 - ・一人の人間としての存在価値を教える。
- リレーションづくり（かまへの無い感情交流と信頼関係）
 - ・先生は「自分の味方である」「自分の身になって聴いてくれる人である」と生徒が思えるかかわりを心がける。
 - ・『治そうとするな、わかろうとせよ』の姿勢でかかわる。
- 原因探しから解決志向へ（ないものねだりからあるもの探しへ）
 - ・今までやってきたことで『うまくいったこと』『できていること』『できそうなこと』に目を向ける。
- 秘密の保持（守秘義務）

〈 教師が必ず点検したいこと 〉

- ・「I am OK, You are OK.」と思えますか？
- ・共感する心と受容する心をもっていますか？
- ・子どもの問題（行動）を成長へのチャンスととらえることができますか？
- ・自分の人生を生き生きと生きていますか？
- ・自分のかかわり方がどのように子どもたちに届いているか見えていますか？

この教育相談的なかかわり方は、生徒だけでなく保護者とのかかわりについても有効であると考えます。

4 まとめと課題

調査研究の第一歩として、現場の協力を頂いてアンケートによる実態調査を実施した。アンケートのねらい、質問項目の内容、対象者数の決定、対象校の選定の仕方等については、研究のねらいに沿うように吟味した。調査結果の処理の仕方や得られたデータの解釈については、研究協力者の適切な助言を頂き、アンケートの扱いや研究の進むべき方向を明確にすることができた。アンケートについては、その分析に主眼を置くのではなく、適当な統計処理を加えた。その結果、現場で使えるチェックシート「中学校生活アンケート」と「中学校生活アンケート集計表（個人用及び30人学級集計用）」を作成することができた。また、現場における実践から研究主題に迫るものを求めるため、聞き取り調査を行った。「仮説と検証」という視点から、「現場の知恵を生かす」という視点に切り替わるきっかけを得たのも、研究協力者会議における話し合いがあったことである。

研究協力校の先生方からは、学校・学年の取組みに加え、一教師としての考え方や指導法などを伺うことができたほか、貴重な冊子やプリント等も頂いた。ご協力のおかげで、多くの実践例を集約することができ、指導のモデルを作成する作業に役立った。聞き取り調査の結果は、研究報告書の中の「アイディア集」に可能な限り凝縮させたが、紙面が限られているため、割愛せざるを得なかった実践例もある。ご協力をいただいた中学校の皆様には、この場を借りてお詫びを申し上げたい。

ところで、本文「2-(1)アンケート調査」でも述べたように、中学校1年生を対象に行ったアンケート調査と教員を対象したものとは、項目によって、際立った違いが見られた。両者に見られる意識のずれに関しては、「教師と生徒の間には、考え方や捉え方にそもそも違いがあるはずだ」という認識を持つことも必要である。認識の違いがなぜ生じるかを問題にすることより、そこを埋めていこうと努力することが、児童生徒と教師のリレーション（信頼関係）を深めることにつながるはずである。同時に、子ども達の思いを教師が的確に感じ取る手立てを講ずることも必要である。教師の思いや努力が空回りすることなく、子ども達にうまく伝わることを願って止まない。

最後に、各学校現場における「暗黙知」を絶えず表出させることにより、現在の「形式知」が陳腐なものとならないことを望む。即ち、本研究集録（特にアイディア集）が各学校の実情に合った形になり、子供たちの適応指導に真に役立つものとなっていけば幸いである。

【参考図書】

- 河村茂雄 著「Q-U 楽しい学校生活を送るためのアンケート」図書文化
 菊池とく 著「月刊国語教育研究」より「教室のちえ」日本国語教育学会編
 國分康孝 監修「エンカウンターで学級が変わる 小学校編」図書文化
 國分康孝 編「育てるカウンセリングが学校を変える 中学校」より 梁瀬のり子 著
 図書文化
 手塚郁恵 著「好ましい人間関係を育てるカウンセリング」学事出版
 西川 純 著「実証的教育研究の技法」大学教育出版
 西川 純 著「学び合う教室」東洋館出版
 諸富祥彦 著「学校現場で使えるカウンセリングテクニック」誠信書房
 諸富祥彦 編著「学級作り スタートダッシュ 中学校編」図書文化
 平成14年度「生徒指導上の諸問題の現状と文部科学省の施策について」文部科学省

研究協力者（平成13年度～平成14年度）

山形大学教育学部教授 宮崎 昭

調査研究担当者

1 年 次（平成12年度）	2 年 次（平成13年度）	3 年 次（平成14年度）
教育相談部長 深 瀬 薫 主任指導主事 真 室 順 一 指 導 主 事 横 田 純 一 指 導 主 事 工 藤 哲	主任指導主事 小 柳 秀 記 指 導 主 事 菅 間 裕 晃 指 導 主 事 西 村 仁 美 指 導 主 事 横 田 純 一	主任指導主事 小 柳 秀 記 指 導 主 事 齋 藤 一 男 指 導 主 事 西 村 仁 美 指 導 主 事 横 田 純 一

発 行 平成15年3月
 発 行 者 山形県教育センター
 天童市大字山元字犬倉津2,515
 TEL 023(654)2155
 印 刷 所 ㈱ 弘美堂印刷所
 山形市青田南24-45
 TEL 023(631)2255